陽西今昔物語

宇都宮市西公民館
ふるさと研究講座編

宇都宮市西公民館

陽西今昔物語
宇都宮市西公民館ふるさと研究講座編
宇都宮市西公民館

陽西今昔物語

宇都宮市西公民館
ふるさと研究講座編

宇都宮市
西公民館

「ふるさと研究」によせて

宇都宮市西公民館長　黒須　凰壽（こうじゅ）

私にとっての「ふるさと」は、西公民館対象地域であります。と申しますのは、この地で生まれ、小中学生時代を送ったからかもしれません。

私の父は、偕行社の東門と軍道（今の桜通り）に挟まれた一角で偕行社指定の軍服店をやっておりました。今は、偕行社といっても、分かる方も少なくなってしまいましたが、陸軍将校の遊戯施設であり、今の「くろかみ荘」や「桜美公園」一帯がその敷地でありました。そこに二階建の大きな建物二棟と管理人室、その他三棟ぐらいありました。そのうちの一棟を借りて、父が事業を行なっていたわけであります。

偕行社は、広い敷地を持ちながら利用はあまりされておらず、もっぱら私の遊び場になっておりました。花見の時期は、私の家の北側にサーカス小屋、南側にお化け屋敷など多くの見世物小屋が軍道の両側一ぱいに立ち並び、夜は、ぼんぼりが点燈され、夜遅くまで賑わい、遊び場には不自由しませんでした。

一方、支那事変の戦局が有利な時代には、南京やその他の大都市が陥落する都度、昼は旗行列、夜は提燈行列が行われ、大衆が戦勝に酔っておりました。

まだ、幼い私には、その陰に幾多の犠牲者及びその家族の心情など汲み取ることもできず、ただただ、戦勝に酔った事を悔いております。

今、当時を振り返って見て、良きにつけ、悪しきにつけ、当時の生活文化、時代考証、その他古き良き時代の建物が滅失され、新しくビルが建ち並び、人々の性格までも変えてしまう時、ただ茫然と流れに流されているようで、一抹の淋しさを感じておりました。

こんなとき、当時西公民館運営審議会委員をされておりました柏村祐司先生より、単なる学習活動のみでなく、研究活動の事業があってもよいのではないか、との意見があり、私も心から願っておりましたので、その正否を度外視して、思いきって実施することにしました。

時は昭和六十二年度春期から、数年の継続事業とし、予算を特に持たず、数多くの情報提供者は、無償で当時のお話を伺うこととし、研究会のメンバーの方も同じく、足と汗のボランティア活動を続けていただきました。その成果がここに集大成されますことは、私として心からお喜び申し上げます。特に柏村祐司先生をリーダーとし、始めから殆ど落伍者もなく、最後までよくまとまって活動されましたことは、その絆の強さを感じさせられ、頭の下る思いでいっぱいであります。

心からお祝いを申し上げるとともに、末筆ながら、多くの御協力者、ふるさと研究のメンバーの方々の御多幸をお祈り申し上げます。

「ふるさと研究」にあたって

ふるさと研究講座講師　柏村　祐司

「ふるさと研究」は、宇都宮市西公民館主催の講座として開かれたものです。公民館事業をより充実させるためにはどうしたらよいか、このことについては、どこの公民館でも苦慮しています。そこで、西公民館では主催事業の充実の一方策として、従来の講師の話を受講生が聞く方式から、受講生自らが主体的になって活動をし問題を解決する事業を思いたったのです。同じ目的のことをするなら、自らが主体的になった方がより楽しく、面白くなります。西公民館では、その点に着目し、その結果、自らの手で西公民館区域の歴史を明らかにしようということで「ふるさと研究」となったわけです。

明治以後、西公民館区域の変わりようは、宇都宮随一といっても過言ではありません。明治四十年頃、つまり、宇都宮市に第十四師団が設置された当時、西公民館区域は、麦畑と平地林、その間に一の沢、二の沢、三の沢などの水田地帯が広がる純農村でした。第二次世界大戦後、師団は廃止され、その施設は私立学校等になり、また、その周辺地帯にも住宅やビルが建ち並び都市化が著しく進んでいます。こうして私たちが遊び、なれ親しんだ諸施設は、いつのまにか取り壊され、やがて人々の記憶の中から遠ざかっていきます。この土地に生まれ、育った者からすれば、そうしたものが記録されないままに、人々から忘れ去られていくことは淋しい限りです。

この研究は、明治以後の西公民館区域の移り変わりを調べることに主眼をおき、調査の方法は、お年寄りからの聞き取りを中心に、先人の著書、碑文等を参考にしました。調査が進むにつれ西公民館区域内の移り変わりが明らかになりましたが、逆に疑問も続出し暗しょうに乗り上げてしまったものもありました。宇女商東側に広がる住宅地開発のさきがけとなった陽西土地整理組合は、その代表的なものでした。昭和にできた組合の実態が調査が進むにつれて疑問がで、逆にわからなくなってしまったのです。また、宇都宮市史等に書かれてある内容にもいくつかの疑問点を見つけました。例えば桜通りに植えられた桜の木の本数ですが、「桜並木ここにありき」の碑文には五百有余本とありますが、市史には五千本とあります。五百有余本と五千本では、あまりにも違いすぎますが、こうしたものを発見したことも、ふるさと研究の成果とも思います。

私は、ふるさと研究講座の指導者として迎えられましたが、講座の主体者は受講者であり、私はカジ取り役をやったにすぎません。そうした意味で、ふるさと研究は、公民館のおもわく通りに進み大成功だったと思います。受講者は十余人たらずでしたが、当初の予定を越えて三年間開講されました。ともすれば、利用者数など量的なことが問題視されますが、ふるさと研究のような質を問う講座がもっと重視されてよいかと思います。

最後に、この講座を企画していただいた西公民館に対し敬意を表すると同時に、色々とお話して下さったお年寄りの方々に厚く感謝の意を表する次第です。また、この本が皆様のふるさと理解になっていただければ幸であるとともに、受講者の皆様方がこれを機に自ら学ぶ姿勢を続けられますことを切に期待いたします。（栃木県立博物館主任研究員）

「陽西今昔物語」の命名について

この本は、宇都宮市西公民館の自主講座「ふるさと研究」の成果をまとめたものです。古く宇都宮を宇陽ともいいました。陽西とは宇都宮の西部地域を指していった言葉です。宇都宮の西部にあたる西公民館地区の聞き語り等を記した本なので「陽西今昔物語」と名づけたしだいです。

目　次

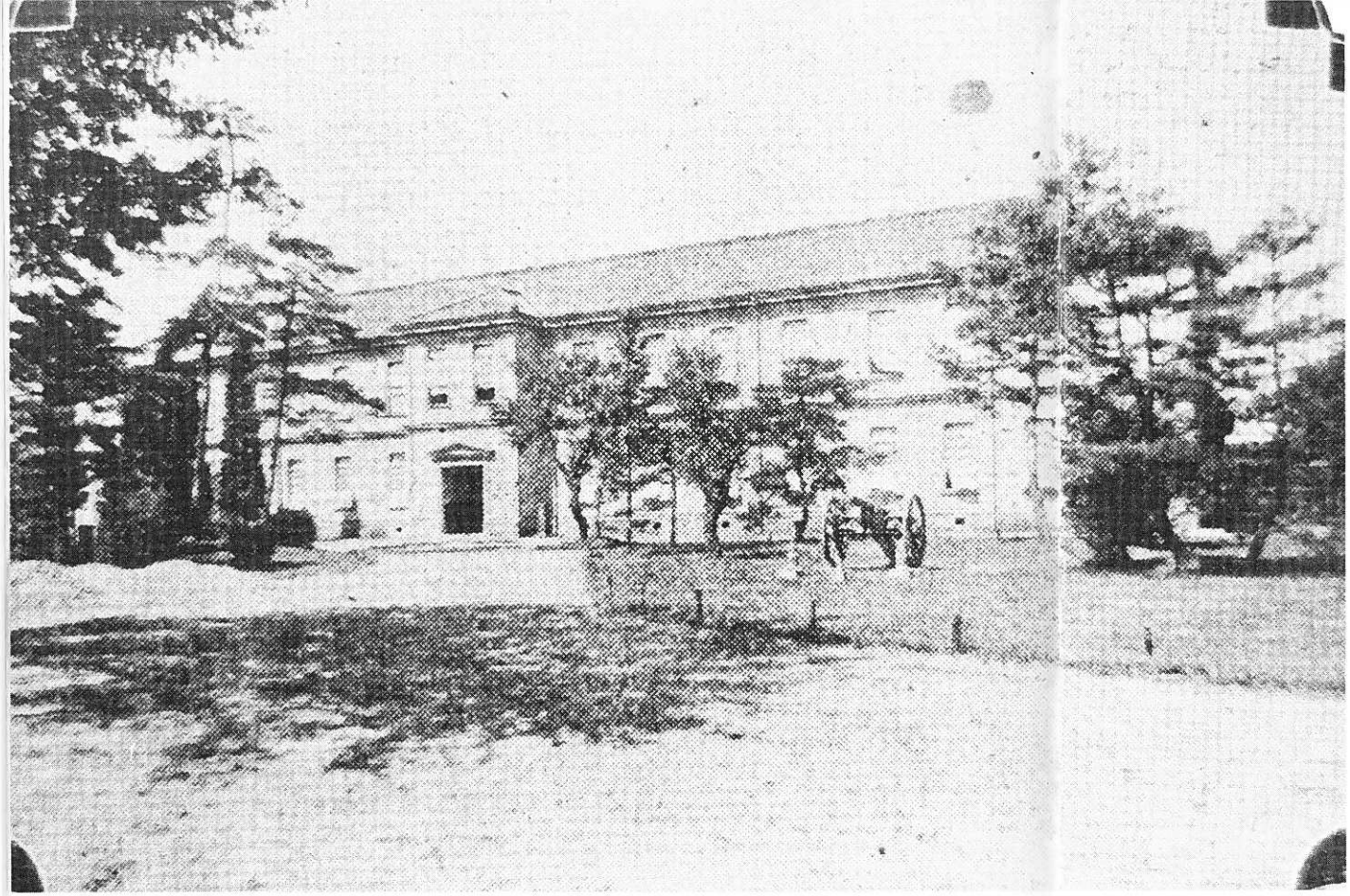
「ふるさと研究」によせて　宇都宮市立西公民館長　黒須　凰壽　2
「ふるさと研究」にあたって　ふるさと研究講師　柏村　祐司　4
第十四師団の設置　8
軍道の桜並木　14
軍隊商い　18
駒生開拓　20
宝木の由来　23
六軒と幻の護国神社外苑運動競技場　24
宗教法人栃木県護国神社　26
宇都宮の人車鉄道（軌道）　29
羽黒神社の祭りと育成牧場　34
滝尾神社　38
和尚塚　40
丹ん堂　42
旧家の一年　44
西公民館地域内に設置された高等学校の変遷　50
［資料］宇都宮市略年表　54
地図で見る宇都宮市西部の変遷　58
編集後記　62

第十四師団の設置

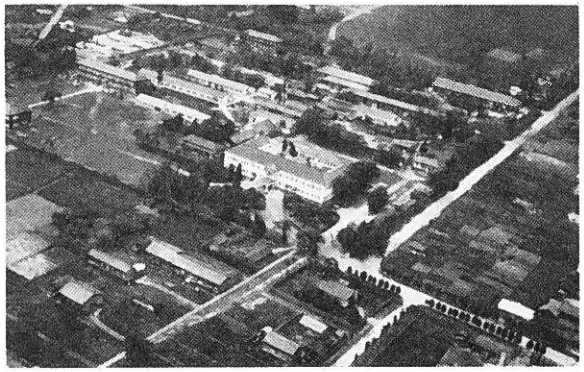
宇都宮市は戦前、第十四師団が置かれ軍都として栄えました。桜通りはもともと第十四師団設置のさいに軍道として設けられたものです。また、国立栃木病院や市西部に点在する私立学校などもかっての師団跡を利用したものです。宇都宮市の街並の基礎は、江戸時代にできあがりましたが、桜通り以西の旧市内の開発は、この師団設置によるところが少なくありません。

第十四師団は、日露戦争の最中、軍備の増強に迫られ明治三十八(一九〇五)年四月に九州小倉で編成されました。宇都宮市に駐屯(ちゅうとん)するようになったのは明治四十(一九〇七)年十一月で、翌明治四十一年四月には、師団司令部をはじめ第二十七旅団司令部、歩兵第五十九、第六十六連隊、野砲兵第二十連隊、騎兵第十八連隊、輜重(しちょう)兵第十四大隊が宇都宮市に設置されました。この他、師団衛戍(えいじゅ)病院、糧秣廠(りょうまつしょう)、兵器支廠、憲兵隊本部、偕行社(かいこうしゃ)、衛戍監獄、射撃場など、また、これらの諸施設を結ぶ軍道が併せて造られました。

こうした師団の設置は、もちろん国の方針によるものでしたが、宇都宮市や宇都宮市民の設置運動にも強いものがあったようです。当時、これといった産業のない宇都宮市にとって軍の施設ができ、たくさんの軍人、兵隊が住むことは経済的に見てもかなりの期待がもてたからです。師団設置当時、あたり一面麦畑が広がるような畑地でしたが、やがて師団を相手に商売を営む人が移り住むようになりました。



第14師団司令部(大正7年)



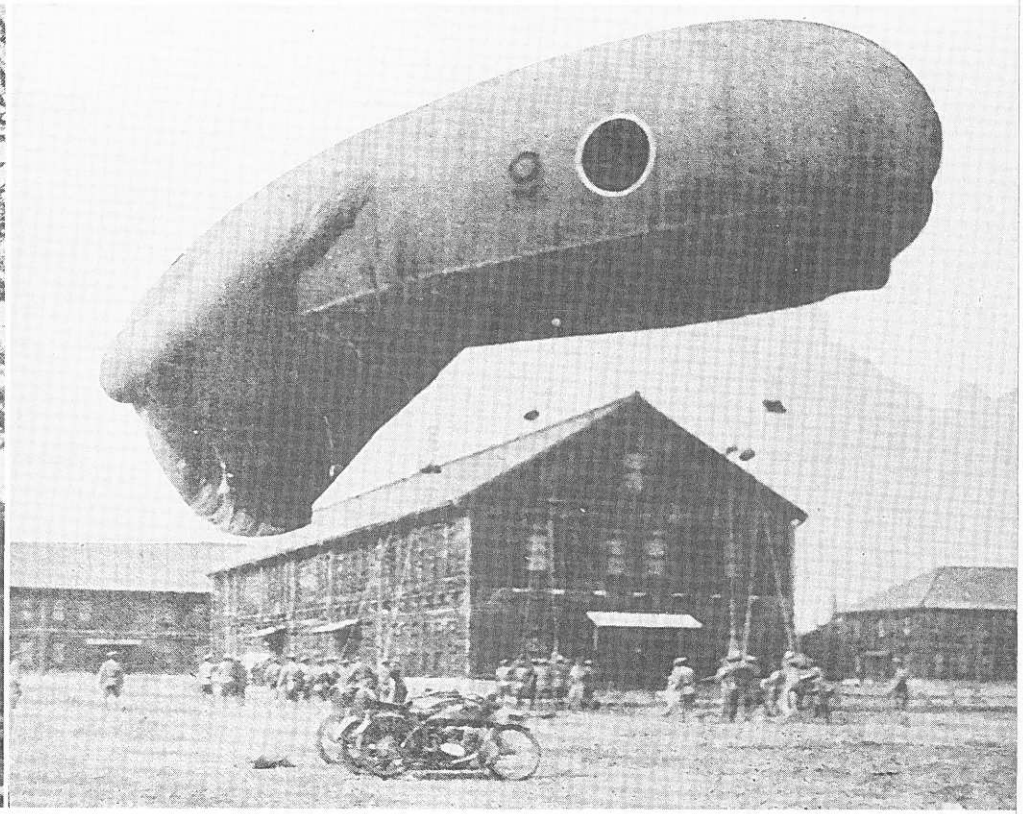
設立直後の国立栃木病院

師団衛戍病院……第十四師団に附属した陸軍病院

糧秣廠……軍隊で兵と馬との食糧を扱った所

偕行社……旧陸軍の現役将校及び相当官を社員として、社員相互の扶助や親睦などの事業を行なった団体

騎兵隊……歩兵に準ずる火力装備と乗馬と機械化部隊とを有し、乗馬・徒歩いずれの戦闘をなし得た部隊



歩兵第59連隊の兵舎と気球（大正14年頃）

■**第十四師団に所属する連隊の跡地利用**（平成元年四月一日現在）

①第十四師団司令部
——国立栃木病院

②第十四師団長・副官官舎
——地方合同庁舎

③憲兵隊本部
——県公害研究所（元宇都宮保健所）

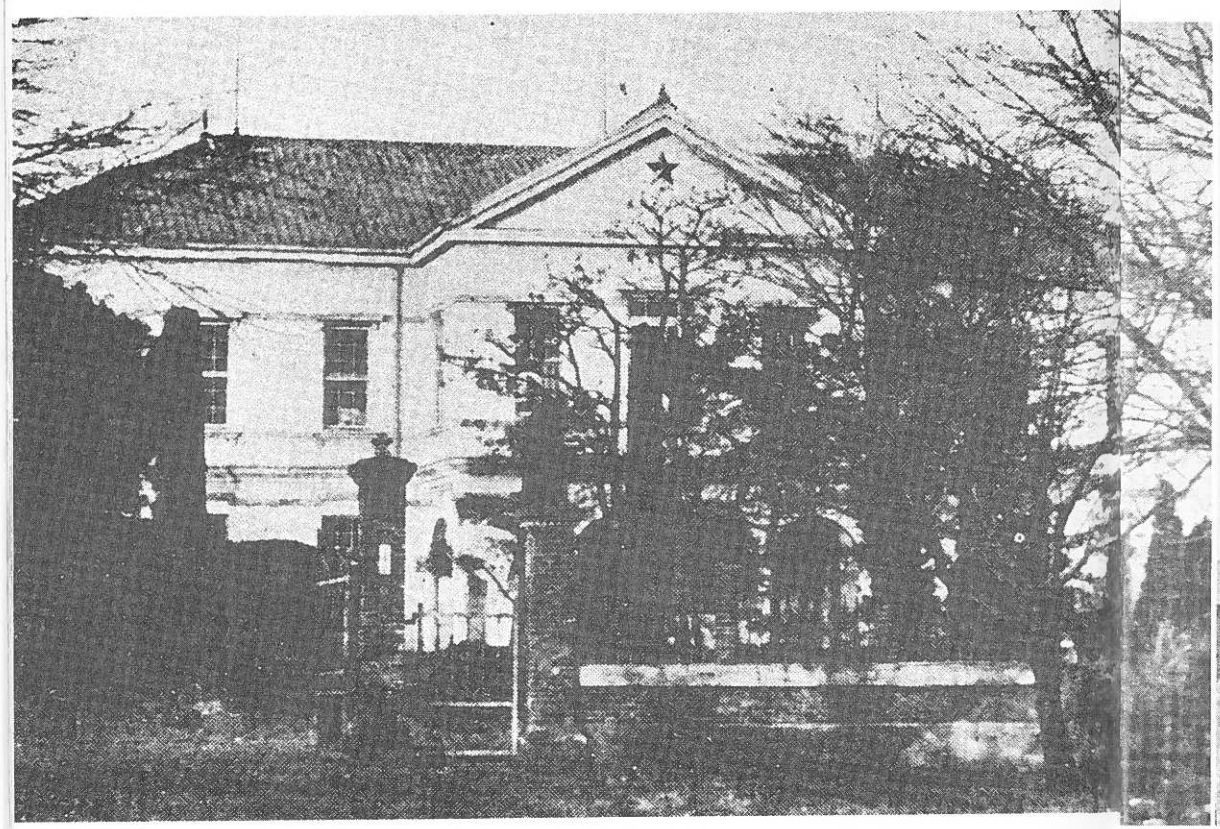
④宇都宮偕行社
——足利銀行本店北側、桜美公園、プラザインくろかみ周辺

⑤衛戍病院（第十四師団司令部）
——国立栃木病院

⑥野砲兵第二十連隊
——宇都宮学園高校、宇都宮短大附属高校、県営睦住宅、普恵園、長崎屋（元前田工業）

⑦輜重兵第十四大隊・騎兵第六十八連隊
——作新学院

⑧兵器支廠



偕行社（大正13年頃）

——中央公園、博物館、日本たばこ

⑨歩兵第五十九連隊
——高等職業訓練校、若草養護学校身障者福祉センター等周辺

⑩糧秣倉庫
——県経済連農協、県開拓農協倉庫

⑪歩兵第六十六連隊（大正十四年四月二十一日解散）
——中央女子高（男子師範・第二高等女学校）、警察学校

⑫衛戍監獄
——少年鑑別所

⑬練兵場・射撃場
——戦後元軍人や軍属、復員兵など二十七～二十八名が駒生開拓農業協同組合地に入植し農業に従事現在は住宅地

⑭射撃場
——駒生運動公園

⑮連隊長官舎
——東京インテリア

宇都宮市及第十四師團全圖

師團敷地総反別百五十九町五反八畝十六歩
此坪数四十七万七千二百五十六坪

練兵場
第十四師團兵器支廠
第十四師團輜重兵大隊
第十四師團兵第八聯隊
第十四師團兵第廿聯隊
停車場
構内線路
市中町名表
馬場町 本郷町 南新町 花房町 千手町 馬喰町
曲師町 清住町 伊賀町 日野町 小田町 川向町
鍛冶町 新石町 西大寛町 劔宮町 扇原
杉原町 材木町 大寛町 今小路町 清水町 築瀬
江野町 境町 四條町 下河原町 宮島町 宿郷
池上町 挽路町 小幡町 元石町 大工町 今泉
傳馬町 茂登町 松峯町 石町 上河原町 塙田
尾上町 逢巻町 河原町 中河原町 小門町 戸祭
泉町 大黒町 一條町 押切町 寺町 旭町
小傳馬町 歌橋町 二條町 大町 新宿町 一丁目
壽町 熱木町 三條町 相生町 小袋町 二丁目
宇都宮八下野ノ中央ニアリ四隅八河内郡ナリ東西一里十一町三十五間南北一里十八丁三十二間周圍四里九十一間面積方一里三丁アリ
陸軍
陸軍
陸軍

軍道の桜並木

足銀本店前の通りを桜通りといいますが、この通りは明治四十一（一九〇八）年四月、第十四師団の設置に伴い野砲兵第二十連隊（現・宇都宮学園高校、宇短大附属高）と歩兵第五十九連隊（現・若草養護学校等）を結ぶために路幅二〇メートル、長さ二キロメートルの軍道として造られたものです。当時はその道幅が十間（十間＝一八メートル）であったため十間道路とも呼ばれました。

この軍道のうち現鹿沼街道交差点から日光街道交差点までの道路両側に明治四十一年から同四十二年にかけてソメイヨシノ桜約千本が植えられました。

大正中期頃には成長した桜の木が見事な花をつけ、軍道の桜並木と呼ばれるようになりました。その季節には花見客で賑わい、サーカスやオートバイ曲芸、お化け屋敷といろいろな見世物小屋ができ露店が立ち並び、全盛期には数千の人出があったといわれます。ここに出店した中村うなぎ屋ではヨシズ張りの二階を架設し芸者衆もおいたということです。この桜並木は戦前はもとより戦後も昭和三十年代まで桜の名所として市民に親しまれましたが、交通量の増加に伴う道路拡張計画により昭和三十八（一九六三）年、桜の木は伐採されました。今では「桜並木ここにありき」の碑と共に桜通りの名前だけが残りました。

――桜の木は五千本という記録もあります。また、この並木は第十四師団創設の記念として当時の鮫島師団長が発案したものともいわれています。

花見客がくり出した軍道の桜並木（昭和14年）

仮装行列で賑わう軍道

「桜並木ここにありき」の碑

■軍道の桜植樹記念碑

この記念碑は、もともと大通りと桜通り十文字の大通り北側の所に建っていたものです。戦後取り除かれ、各地を点々とし、現在は陸上自衛隊雀宮駐屯地内に保存されています。時の栃木県知事中山己代蔵が文章を書いたもので、桜植樹のいわれが記されています。

（銘文）

陸軍中将従三位勲一等功二級男爵
鮫島重雄篆額

明治四十年春有師団増設之議也相我栃木県宇都宮市近郊定為第十四師団衛戍地号令一下闔県歓喜不措乃○資購地以献官府廣哀実為四拾余万歩是以兵営建築得其便宜不日竣功而官亦更興土木新闢達営舎之周道広濶平担如砥如失以後公私交通由来軍営所在不独都市農商被其恵沢已抑亦振作地方之人心発揮所謂武士道者益不為少矣士民之謳歌良有以也於是河内郡長梅村寛逸宇都宮市長本多鐐吉等胥謀欲伝此盛事於後世募資郡市購桜樹千余株栽千新道之両側顧培艱数年当春風駘蕩百花爛熳之候夾路之錦萼○葩興軍隊之帽影斂光相映発加一段之壮観可知也我邦古来武士対桜花之事迹伝佳話者頗多焉豈其高風清姿粋然相契合者非耶栽植記念之挙非偶然也今茲欲建碑於樹下以勒其来由絵謁余為之銘余深嘉其挙者の銘曰

軍営鎮在晃山陽　玉樹逐春長弄芳
花是桜兮人武士　邇遐齊仰閎之光

明治四十四年三月十日
栃木県知事正五位勲四等
中山己代蔵選
正七位勲四等　横堀三子書
鈴木原洋刻字

（大意）

明治四十年春師団増設のことがあり、栃木県宇都宮市近郊を第十四師団駐屯地として決定したので、県当局は大いに喜び資金を支出して土地を購入したが、その広さは四十万坪に及んだ。兵舎の建築にも便宜を計り、間もなく竣工した。兵舎周辺の道路も広く、平坦に造成され、郡市の農民や商人も等しくその恩恵を受け、公私とも交通には便利となった。ここにおいて武士道を大いに発揮されるために有益な事業をしなければならないとのことで、河内郡長梅村寛逸、宇都宮市長本多鐐吉等が相謀り、桜の苗木千本余を新道（軍道）の両側に植えた。これが数年を経れば春の頃には桜花が爛漫と咲き誇り、この桜花の下に軍人の姿を散見できるのは実に壮観である。わが国には古来「花は桜木、人は武士」という言葉があるが、この事業は誠に有意義である。いまここに碑を建てて、その由来を記すものである。

〈「雀宮の野仏」雀宮郷土史研究会昭和六十二年刊より〉

陸上自衛隊雀宮駐屯地内の桜植樹記念碑

桜を植えた直後の軍道―白亜の建物は偕行社、その前の道は大谷街道―

軍隊商い

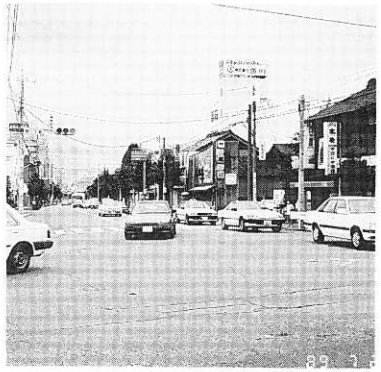
第十四師団が設置されると、その周辺で様々な軍隊相手の商いが行われるようになりました。今も大通りにある武蔵屋商店は、こうした軍隊商いによって繁盛した商店のひとつです。ここでは、武蔵屋さんのことについて紹介しましょう。

武蔵屋さんは現店主、井岡トミさんが宮島町から桜十文字近く（当時西原町二七九五番地）に転居した八歳ごろ、お母さんが始めたものです。トミさんが明治四十二年生まれですから、たぶん大正五年頃のことでしょう。

地の利を生かした軍隊相手の商売は順調に発展し、やがて除隊土産品を扱うようになりました。除隊土産というのは、文字通り入隊の時に親戚や隣近所から頂いた餞別やお祝いのお返しに配る記念品のことです。

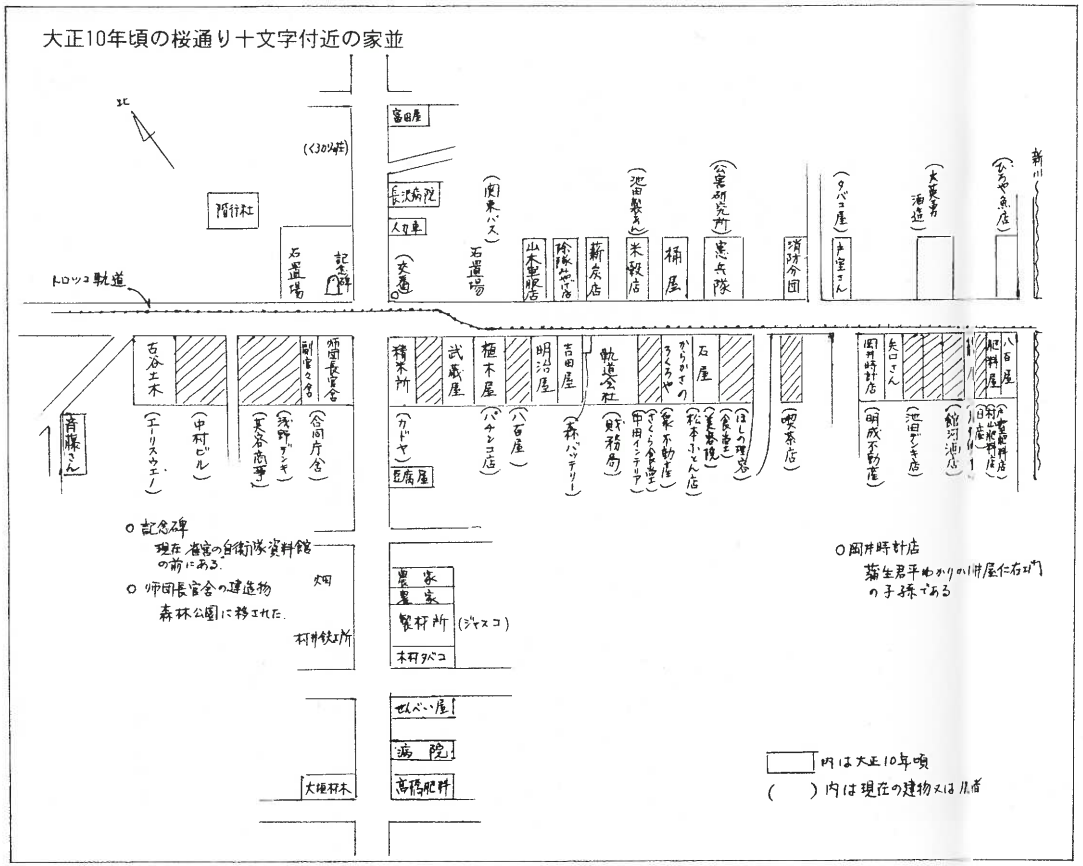
武蔵屋さんでは手拭（てぬぐい）、お盆、灰皿、徳利、盃、風呂敷、重箱、軍帽、除隊服（背広）などを幅広く揃えていました。今の方々には除隊土産といってもまったく馴染みのないものだと思いますが、当時は兵役を終えた若者に欠かすことのできないものでした。

また、武蔵屋さんは騎兵隊（きへいたい）、輜重隊（しちょうたい）、野砲兵二十連隊の出入り商人も務めていました。出入り商人というのは軍隊内の酒保（しゅほ）で商いをする資格を持った商人のことです。この出入り商人は年に一度、軍隊で行われる入札で決定され、軍隊に出入りする時は、木製の通門証をもらい、兵舎に入る際はこれを衛兵に見せることになっていました。



車行きかう現在の桜通り交番付近

武蔵屋さんが扱った品物は、主として、うどん、そば、まんじゅう、甘納豆、日本酒などで日本酒は四斗樽を四本納め一人一合づつ売っていたということです。そして、これらすべての売上金の三％を軍に上納することになっていました。



また、年に一回、軍旗祭という軍隊のお祭りがありました。日頃、規則が厳しい軍隊ですが、この日ばかりは無礼講でお酒は飲み放題、営内に設けられた舞台では様々な催しが演じられ楽しい一日を過ごしたそうです。

トミさんの記憶に基づいて大正十年頃の大通りと桜通りの地図を書き起こしました。ごらんの通り、軍隊の設置によって周辺の商店も軍関係のものが多かったようです。現在では、その当時の面影を残している商店はほとんどなく、僅か数軒が往時の面影を偲ばせています。

輜重隊……軍で扱う食糧、衣服、武器、弾薬など軍需品の輸送を担当した部隊

酒保……軍隊内の酒場・売店

野砲……大砲の一種。野戦で最も多く使用されるもの

駒生開拓

昭和二十年八月十五日の敗戦によって軍人や軍属、そしてその家族がが続々と外地から引き揚げてきました。が、当時の日本には戦争によって雨露をしのぐ住まいも食糧も極端に不足し、復員してきた人々の世話をすることもままならぬほど混乱していました。

しかし、そんな時、宇都宮市内の海軍人事部(現・関東財務局)跡に「復員軍人職業指導所」が設けられ、松本勲さんらが指導員となって元軍人、軍属の生活指導や土地開拓の世話にあたることになりました。

この近辺では宝木練兵場跡、駒生練兵場跡、宝木歩兵連隊跡、射撃場跡(昭和二十五年朝鮮戦争勃発により国に買い上げられる)などが開拓地として選ばれ一人一世帯一町歩(一ヘクタール)をメドに払い下げられ、昭和二十一年五月頃までに県内約二千人が入植しました。

このうち駒生の練兵場跡、射撃場跡には二十七～八人が入植し、最終的に二十二人二十二世帯(陸軍十八人、海軍一人、軍属一人、その他二人)の人々が開墾に当たりました。

当初、任意の帰農組合(組合長松本勲)を組織しその開拓にあたっていましたが規模の拡大とともに昭和二十一年に駒生開拓農業組合(組合長松本勲)を結成しました。そしてその後、開拓の促進、生活(農業)の安定などに務めましたが、世の中の環境の変化と周辺の宅地化によってこの農業組合も昭和四十五年に解散しました。

この駒生開拓に当たられた、二人の方に当時の苦労話などを伺いました。その要旨は次のとおりです。

新しい家が建つかつての駒生開拓地

軍属……軍人以外の軍に所属した役人、あるいは役人待遇者

■松本勲さんの場合

松本さんは、昭和十五年に予備士官学校を卒業後、上海勤務を経て昭和十七年に内地勤務となり第十四師団司令部の参謀、師団副官を務め敗戦を迎えました。

副官当時の住まいは、師団長官舎(現・桜五丁目地方合同庁舎)のすぐ隣りでしたが、その後の戦況の激化により留守師団長官舎が四条町の松寿園に移転すると、それについて住まいをその隣りの明治屋森留次郎さん方に移したということです。

敗戦とともに「復員軍人職業指導所」が設置されると当時の県知事小

川喜一の命を受け指導所の指導員となりました。そしてその後、乞われて農業団体の組合長を勤めるなど駒生開拓に尽力しました。

特に組合長として、県や市との折衝、入植者の斡旋、配給米・重労米の交渉・運動など大変な苦労をされました。

その頃の食糧はすべて一人二合勺(約三八〇cc)、重労米一四勺～五勺(一勺は約一八cc)と定められた配給米でしたが、しかし、これも米ばかりではなく、カボチャ・ジャガ芋・サツマ芋等が米に換算されて配給され、場合によっては相当遅れて配給されることもあり、苦しい生活状態でした。

入植地は原野で、戦車の踏み堅めた土地などもあり開拓は困難を極めました。松本さんは、結城の鍛冶屋で作ってもらった唐鍬をたよりに開墾をしましたが、一日三〇坪(九九㎡)ぐらいがやっとのことでした。

種は県からもらい受け蒔きましたが、一番困ったのが肥料で、主なものは下肥(シモゴエ)でしたが、これがなかなか手に入らず、元軍隊に勤めていた職員さんの家を回ったりして、やっと間に合わせる始末でした。

作物は、米のほかにトマトなどを作っていましたが、昭和二十九年からは酪農を営むようになり現在に至っています。

■羽石要次郎さんの場合

羽石さんは、敗戦の時、市ヶ谷の陸軍省に勤務(当時陸軍少佐)していましたが、その後東京を離れ妻子の住む大寛町兵器廠通りに移り住みました。

当時、職もなく困っていたところ、元騎兵隊連隊長をしていた中島会輔さん(元陸軍大佐)の誘いを受け入植したそうです。そしてその頃発足した駒生開拓農業協同組合に加入し、役員として入植者の斡旋や農業指導にあたりました。

また、組合員は開拓地に住むことになっていたので、羽石さんは輜重隊の廃棄物置場からトタンや木材をもらい受け自分で家を建てました。本当に雨風をしのぐ程度のものだったそうです。間数は、六畳二間、八畳一間、土間四坪、全部で二〇坪(六六㎡)ありました。

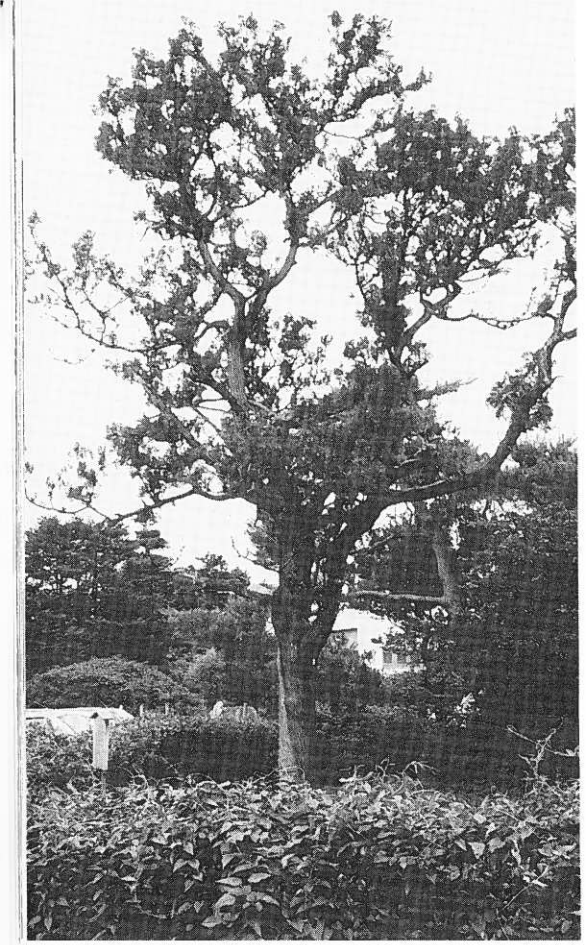
この家を根拠に羽石さんは約一町歩(一ヘクタール)の土地を開墾しながら役員を務める忙しい毎日を送りました。

陸軍省……もと内閣各省のひとつ。陸軍一般の事務をつかさどった中央官庁

宝木の由来

宝木町とか宝木小、宝木中など宇都宮市北西部には、宝木の名がつく地名や学校などがたくさんあります。この宝木の名は、国立栃木病院の正門を入って右手、外来診療棟前中庭にある樹令およそ三百年の猿の手柏(てがしわ)の木に由来するものです。

この木は、もともと六軒地内(現・宝木町一の二)の大塚(現在、塚の形はなく畑となっている。存在した場所は、山口正吉氏宅東北部にあたる所といわれる)の上にあったもので、字細谷の荒井庄一郎氏の所有のものでした。



今なお健在な宝の木

その昔、付近の人々は樹種名を知らぬまま珍木・名木ゆえ宝木と名付け呼び習わしました。江戸時代には、宇都宮の七木の一つにも数えられていたといわれています。

ところで、明治六(一八七三)年に江戸時代から続くこの付近の通称西原十カ新田が合併することになりました。人々はこの名木宝木にちなみ、新しい村を宝木村と名付けたところから、ここに地名としての宝木が生まれたのです。なお、この猿の手柏の木はその後、明治四十(一九〇七)年、宝木村地内に第十四師団司令部(現・国立栃木病院)が設置されたさいに、荒井氏から師団に寄贈され司令部の庭に移植し、現在に至っているということです。

六軒と幻の護国神社外苑運動競技場

宝木一丁目の宇都宮市議会議員安納重雄氏宅周辺の地域は、昔から六軒と呼ばれ親しまれています。それではなぜ六軒という地名が生まれたのでしょうか。それは、もともとこの地が六軒の家からできた村だったからといわれています。

昔からこの六軒を含めた宇都宮市西部は火山灰層からなる洪積台地によって形成されていました。こうした台地は、水はけがよく、降った雨もすぐ地中にしみこんでしまい、地表面には川は流れず、また、地下水位も深く井戸も容易に掘れない住みづらい土地でした。ところが、江戸時代になり人口が増加し食糧の増産の必要性が迫られると、これら洪積台地は顧ってもない農地として開墾されました。こうして江戸時代にできた新しい村が新田です。六軒もその新田の一つでした。近くには六軒を含め江黒、山崎、細谷、西岡、野沢、仁良塚、藤岡、高谷林、西次のいわゆる西原十カ新田と呼ばれる新田村がありました。これらは、江戸時代の寛文年間(一六六一～一六七二)から享保年間(一七一六～一七三五)にかけて開発された新田です。開発には主に渡良瀬川沿岸の古河、館林藩領の藤岡村(古河藩領、現・栃木県藤岡町)、西岡町(館林藩領、現・群馬県板倉町)、江黒村(同)細谷村(同)出身者があたりました。

六軒は、明治六(一八七二)年、西原十カ新田とともに宝木村を形成しましたが、その後国本村に併合され国本村大字宝木字六軒と表記するようになりました。そして昭和二十七年に国本村が宇都宮市と合併し近年町名変更が行われるとこのあたりは宝木一丁目となり六軒の地名はなくなってしまいました。

ところで、この六軒地内の護国神社に隣接する約一五ヘクタールの敷地には、戦前護国神社外苑運動競技場の計画が立てられたことがあります。これは、東京の明治神宮外苑運動競技場(現・国立競技場)をまねて計画したもので、昭和十六年に安納重雄氏の所有地を県が売収したものです。しかし、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発し、中国大陸で満州事変が起こるなど戦時色が濃くなるにつれてその計画は延期され、昭和十八年にはグライダーの練習場となりました。戦後は現宇都宮女子高の農業実習地や周辺の農家の開墾地となりました。当時、小平重吉知事は運動場の計画を実現しようとしましたが、占領軍スペンサー大尉の意により昭和二十三年に付近の農家に解放されました。運動場建設計画はその後、西川田町に移され護国神社外苑運動場は幻と終わったのです。

六軒……角川日本地名大辞典栃木県編中丸新田の項によれば六軒新田を中丸新田ともいう

護国神社と河内青年団によって植樹されたばかりの木々(昭和15年)

宗教法人護国神社

護国神社の前身は明治初期、当時の宇都宮藩知事であった戸田忠友が明治維新の戊辰の役で戦死した藩兵九十六名と「従三位戸田忠恕(ただゆき)公」の霊を祀るために、藩士や領内の有志と協議して明治五(一八七二)年十一月、現在のバンバ繁華街東側高台の「下の宮(二荒山神社南の荒尾崎という丘の上)」に招魂社を建立したのが始まりです。

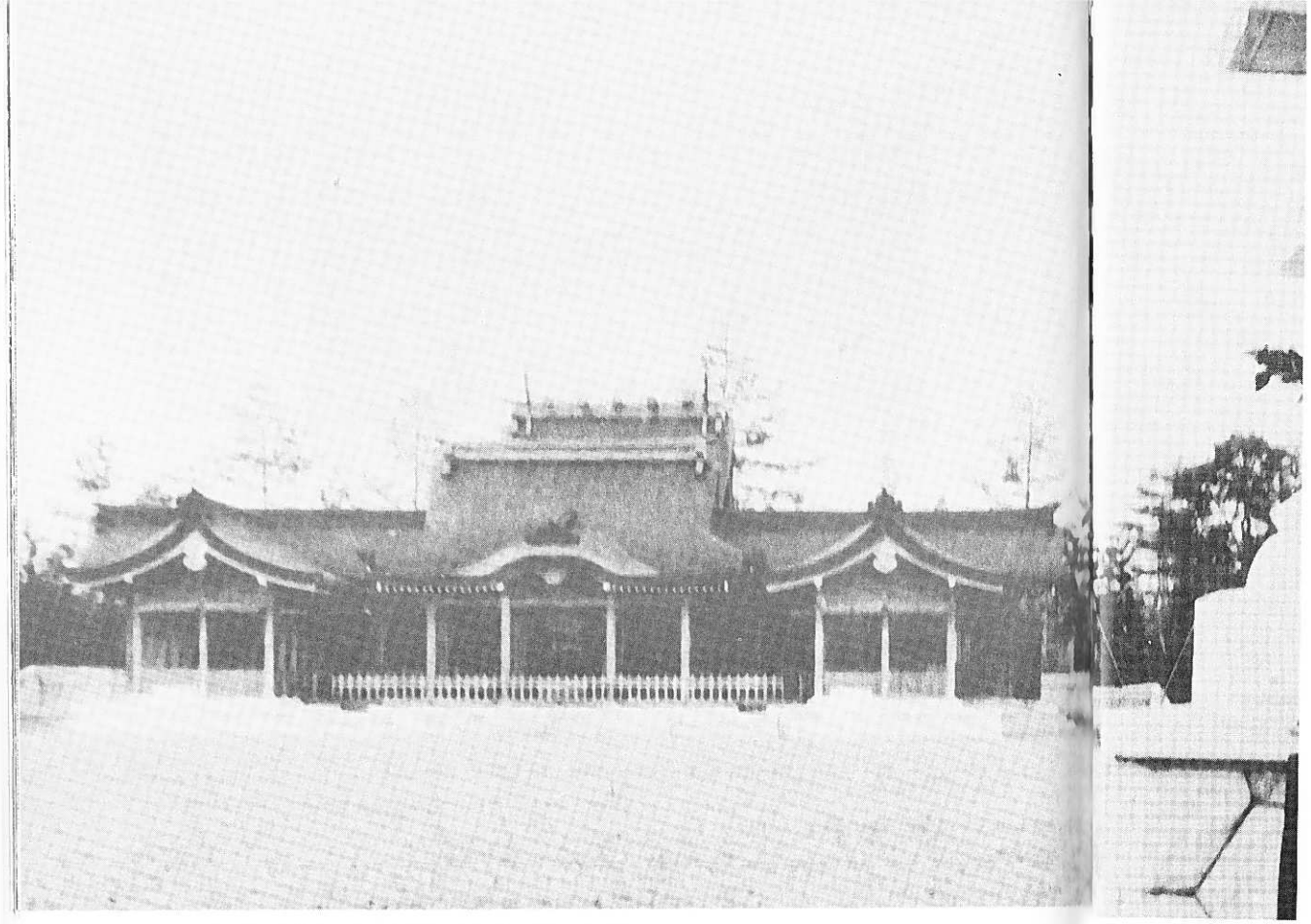
招魂社は昭和十四(一九三九)年四月二十九日に社号を栃木県護国神社と改め、翌十五年四月二十七日深夜、現在の一の沢町に遷座されました。その後、同二十二(一九四七)年一月彰徳神社、同二十八(一九五三)年二月、再び栃木県護国神社とそれぞれ社号を改め現在に至りました。

祭神は「伊邪那岐命、伊邪那美命」を主祭神に祀り、前に述べた藩兵と明治十(一八七七)年十一月の西南の役の戦没者を合祀したものです。以来靖国神社に祀られた本県に本籍を有する戦没者を、その都度合祀し、昭和五十五(一九八〇)年十月当時で五四七四二柱が祀られています。その内訳は次のとおりです。

戊辰の役	九六
西南戦争	五九
日清戦争	一四〇
日露戦争	一二二六
第一次世界大戦	八九
満州事変	二一六八
太平洋戦争	五〇九六四

次に神社の用地策定と社殿建立にまつわるお話を安納重雄さんからお聞きしました。

安納重雄さんが国本村青年団長、河内郡青年連合会副団長などの要職にあって活躍されていた昭和十二(一九三七)年頃、氏に当時の県社会教育課長古沢共治郎氏から神社をバンバから一の沢へ遷座したいため用地斡旋の依頼がありました。その後、用地選定のため元県会議員菊池常八郎氏ほか、数名の県職員が視察に訪れたさい安納さんは自分で所有する一面梨畑であった現在の場所に案内

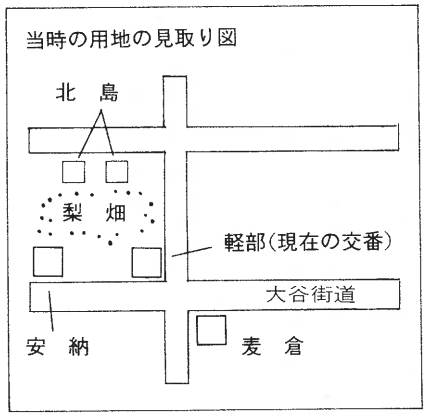


一の沢の地に遷座直後の護国神社社殿(昭和15年頃)

され寄進を申し出たとのことです。安納さんが寄進された一六八〇〇坪の土地はその譲渡について、当時の市長落合慶四郎氏と昭和十二年十二月、市長公舎(一条町)で調印式が行われました。

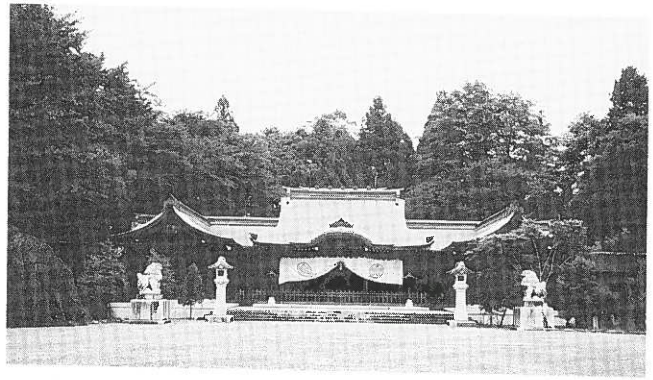
社殿は総木曽檜で造営し、昭和十五(一九四〇)年四月二十九日に遷座されました。

なお、緑深い境内の森は、当時の



河内青年団が樹木を持ち寄って植樹したものです。

戊辰の役……明治元年戊辰の年に行われた官軍と旧幕府軍との戦いの総称。鳥羽・伏見の戦い、上野での彰義隊の戦い。会津戦争、五稜郭の戦いなどを含む。栃木県内各地でも戦いが行われ、身近な所では、六道の辻の戦いがある



現在の護国神社社殿

■護国神社の祭礼

歳旦祭／一月一日
元旦祭／一月一日～七日
建国記念祭／二月十一日
新年祭／二月二十七日
例大祭／四月二十七日～二十八日
例　祭／八月十五日
七五三祭／十一月十五日
新嘗祭／十一月二十三日
大祓祭／六月三十日、十二月三十一日
月次祭／毎月一日、十五日、二十八日

■境内の碑

①東部ニューギニア会が建立した県内六〇〇〇余柱の慰霊碑／昭四十五・三・二十二建立
②宝木会が建立した旧歩兵第五十九連隊並びに東部三十六部隊関係戦死者の慰霊碑／昭五十五・四・五日建立
③宇商同窓会が建立した満州、支那事変関係の戦死者の慰霊碑／昭三十・四・三十建立
④支那ビルマ派遣方三十三師団、歩兵二一四連隊の生存者一同が建立したビルマ戦死者の慰霊碑／昭四十六・九・二十六
⑤満州開拓青年義勇隊三六〇人の慰霊碑／昭四十七・十一・十二建立
⑥日本赤十字社看護婦同方会栃木支部が建立した殉職者一二六人の慰霊碑／昭五十三・十一・八建立
⑦栃木県教育会が建立した皇紀二六〇〇年記念碑／昭五十三・十一・八
⑧忠霊塔（遺骨）

宇都宮の人車鉄道（軌道）

昭和の初めころ、大谷街道には切り出された大谷石を運ぶためにいく本もの軌道が敷設されていました。そのため、材木町から軍道付近（現・桜通り）にかけての道路際の空き地にはいたるところに大谷石がたくさん積まれ、また、道路上や家屋の屋根の上まで大谷石の粉屑が散乱するほどでした。時折、この軌道を大谷石を満載したトロッコが、ゴウゴウとまた「ポーポー」とラッパを鳴らしながら通過して行く勇ましい風景を忘れられない人も多いことでしょう。

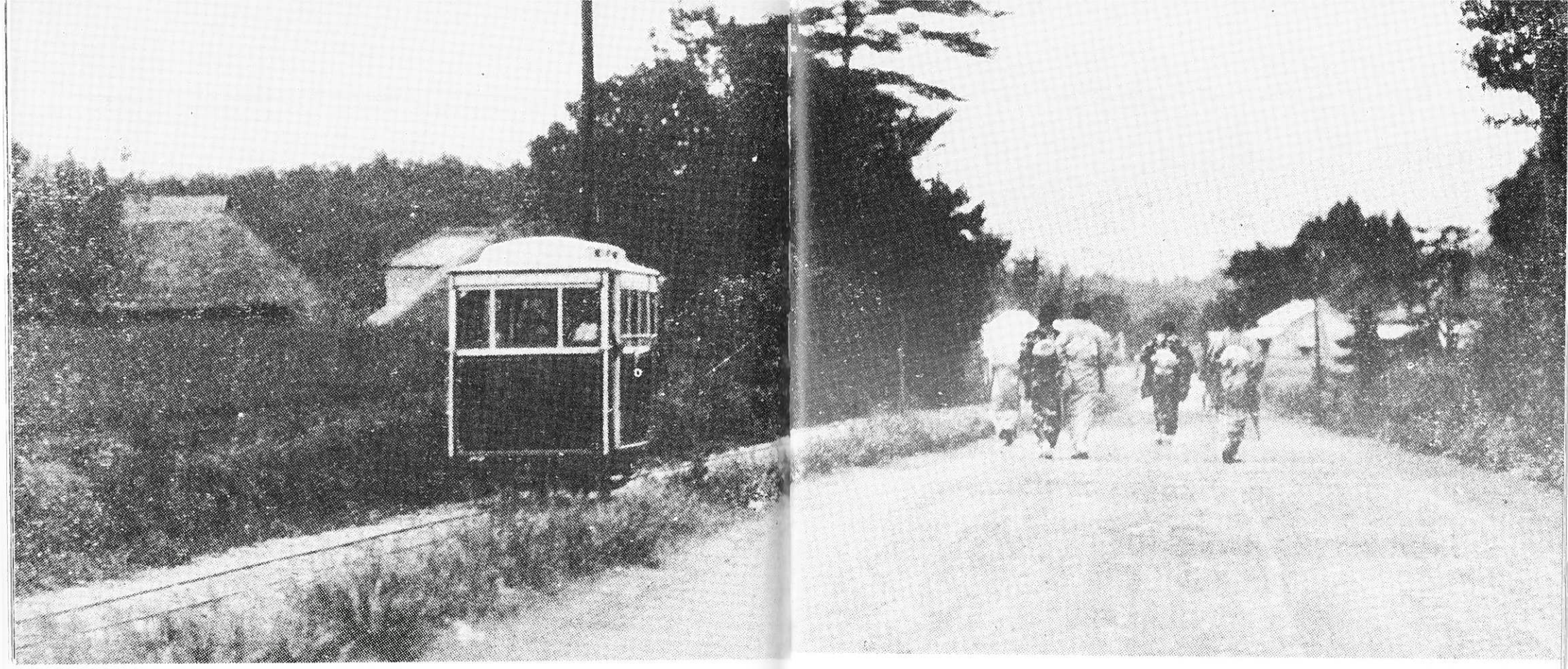
この大谷石は石材として古くは古墳時代の石室（せきしつ）に使用されました。今でも宇都宮周辺に残る古墳にその大谷石を見ることができます。

その後、大谷石は江戸時代に入った元和六（一六二〇）年、「宇都宮釣り天井の伝説」で知られる、時の宇都宮城主本多正純が宇都宮城普請のさい大量に切り出しました。

明治時代に入ると富国強兵の国策により大谷石は石材産業の要として、より一層の発展を遂げました。そして採掘が盛んになるにつれ、それまでの荷車や馬車では、とても輸送が追いつかず、強力な輸送手段として軌道の敷設が検討されるようになりました。

明治二十九（一八九六）年に「宇都宮軌道運輸会社」が設立されると軌道の敷設は急ピッチで進められ明治三十年には荒針～西原間の路線が開業しました。その規模は、全長六・

大谷停車場に集結したトロッコ客車（明治末期）



大谷街道沿いを走るトロッコ客車（昭和初期）

三キロメートル、軌道巾二フィート（六一センチメートル）、客車（一両定員六人）二十両、貨車（トロッコ）五十両と記録されています。貨車一両には一尺×五寸×三尺の石材二十四本が積載できました。動力は人力で客車の場合二人、貨車の場合一人の車夫による手押しのものでした。規模、内容とも、今から考えると粗末なものでしたが当時としては、たいへん新式な珍しい文化そのものでした。

人力車では一人しか乗れないのに軌道なら六人一度に乗ることができ、スピードも速く手押も楽だったわけです。当時、大岩～材木町の運賃は三銭～五銭ぐらい（当時まんじゅう一コ一銭）で、材木町の駅待合室には運賃の料金表が掲示されていたそうです。

次に貨車ですが、これは一般にトロッコと呼ばれていました。石材を大谷から材木町駅（現・幸仁会病院）、または石置場まで運びます。

車夫は腹掛け、腹巻、股引の姿でトロッコを押すのですが、トロッコに勢いがつくと車夫はその後部にある踏台の上に乗り、時折ラッパを「ポーポー」と鳴らしながらそのまま相当の速さで走るのです。

特に今の護国神社あたりから材木町までは下り坂なので、押す方も楽だったようです。

仕事が終わると車夫は空いたトロッコに弁当や一升瓶などを乗せ悠々と押して帰りました。その車夫の姿には生活の厳しさと、ユーモラスさを感じさせられたものでした。

車夫は、いずれも頑健で、一日一升の飯を食べ、一升の酒を呑むといわれましたが賃金は当時としては低い方のようでした。

なおこの大岩～西原間の路線は、明治三十六年から材木町まで延伸されました。軌道は大谷から憲兵隊本部（現・公害研究所）付近まで道路の北側を通り、ここから斜めに道を横断して南側の材木町に至るものでした。

明治三十一年には「野州人車鉄道会社」が設立され新路線が敷設されると軌道はますます人々の足としてまた、輸送の手段として親しまれました。同三十九年に両社は合併し社名を「宇都宮石材軌道会社」と改め、さらに昭和六（一九三一）年に「東武鉄道会社」に買収されるなど幾多の変遷を遂げました。しかし、自動車の普及により軌道路線も昭和十七年ごろから逐次廃止となり、最後まで残った東武荒針線も昭和三十九年に廃止されました。

このように当時の軌道敷設は、栃木県庁の宇都宮市移転、第十四師団司令部の設置と並んで宇都宮発展の基をなしたわけですが、今ではわずかに残る軌道跡に在りし日の面影を残すだけになってしまいました。

最後に軌道各路線の移り変りを次のとおり記すこととします。

蒸気機関車がひっぱる大谷石輸送軽便鉄道（大正3年頃）

大谷石を積んだ軽便鉄道

石室……古墳で遺骸を安置する石で作った部屋

宇都宮釣り天井の伝説……つり上げておき、落とせば下にいる人を圧殺できる仕掛の天井を作り、日光東照宮社参の途中、宇都宮城に立よる将軍秀忠を暗殺しようとしたという宇都宮城改築にまつわる伝説

■宇都宮の軌道

①荒針～材木町間（詳細本稿）
②西原～鶴田間（宇都宮軌道）
——明治三十六年開通
③戸祭～新里芳原間（野州人車）
——明治三十二年開通
④仁良塚～徳次郎間（野州人車）
——明治三十六年新里線より分岐したもの
⑤戸祭～西原間（宇都宮石材軌道）
——明治三十九年開通
⑥荒針～鶴田町（宇都宮石材軌道）
——大正四年軽便鉄道（蒸気機関車）として開通
⑦東武鉄道荒針線（東武鉄道）
——東武鉄道移管後、⑥項の荒針鶴田間を西川田町まで延伸したもの

羽黒神社の祭りと育成牧場

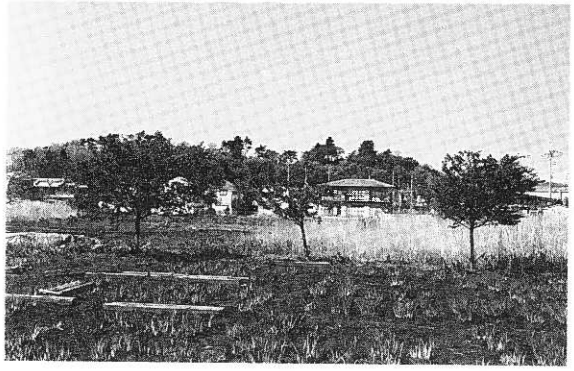
鹿沼街道を西に行くと野口雨情の歌碑のすぐ左手に小高い丘があり、その上には羽黒神社が祀られています。今では神社を残して周りは住宅団地になっていますが、昔この附近はうっそうとした樹木が生い茂る深い森だったということです。

また、この辺りは天正十三(一五八五)年にあった戦いのさい比類ない働きをした三ツ原十郎という人の武勲をたたえ、「十郎ヶ峰」とも呼ばれている古戦場として知られています。

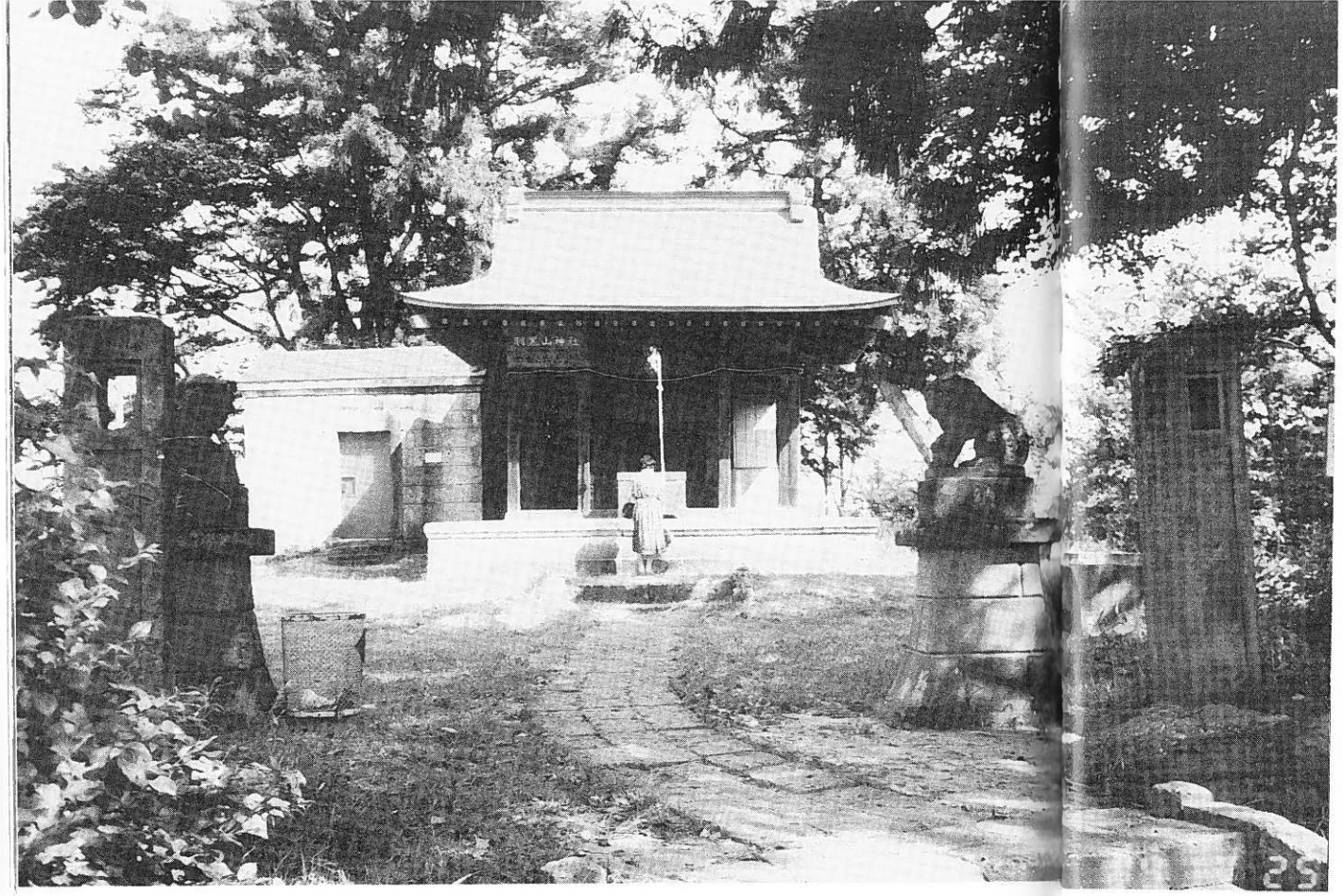
羽黒神社は上河内村の羽黒山と同じく稲倉魂命(うかのみたまのみこと)を祀ったもので、鶴田の有志が上河内村の羽黒山から分霊して祀ったものではないかといわれています。例祭は豊年を感謝して以前は旧暦の十月七日に行われていましたが現在は勤労感謝の日の十一月二十三日に行われています。

この日は各家庭で赤飯を炊き、朝早くからおはやしの太鼓が鳴り響きます。神社の境内では屋台が並び、ゆずや菓子類が売られます。また地区内の愛好会による舞踊や歌が披露され、たいへんな賑わいです。

本殿では参詣者にお札と種子銭が配られます。お札をもらった農家の人は苗代の時、正月十五日に小豆粥を食べた箸にお札をさして水口に立てます。商売繁昌を願って借りた種子銭は翌年に倍にしてお礼参りをします。



羽黒山遠望



羽黒山神社拝殿

祭りのハイライトはなんといっても梵天上げです。梵天はその年に成長した約一〇メートルくらいの長さの根つきの孟宗竹の先に真竹を荒縄で結びつけ、その先に御幣をつけた物です。その梵天を大勢の若者が担いでバタンバタンと道路にたたきつけながら練り歩きます。かつては鶴田の上、中、下の三坪やまた、近くの野尻、長坂、大野市場の人々が競って梵天を奉納しました。しかし現在では、鶴田の三坪が回り番で一年に一本だけ奉納しています。

まだ梵天の担ぎ手がたくさんいた頃は梵天を桜通りから鹿沼街道を通って一の鳥居をくぐり坂道を登り本殿前に運びましたが、現在では当番の宿を出発した後、地区内を回り

一の鳥居をくぐって一気に坂道を登り社前に運びます。社前で最後のもみ上げを行うと、梵天をはずして一番高い木に結びつけ行事は終りです。

秋の一日賑わった山を後に、人々はゆずやお土産をぶら下げて家路に急ぎました。

羽黒山から緩やかな坂を下ると日本中央競馬会宇都宮育成牧場があります。広い敷地はよく手入れされ緑と木蔭が調和し素晴らしい眺めです。

この敷地は明治十八(一八八五)年樺山県令が、十郎ケ峰一帯の払い下げを受けて所有し、後に石田仁太郎氏がこの地を譲り受けて壮大な別荘を建てて居住したのが始まりといわれています。

その後、大正六(一九一七)年に日本中央競馬会の前身である日本レースクラブの理事長エス・アイザック氏の所有となり同氏がこの地に牧場を創設しました。昭和六(一九三一)年に同クラブの所有となった以後、日本中央競馬会の歩みとともに名称を変え、現在の名称になったのは昭和二十九(一九五四)年のことです。四〇ヘクタールという広大な牧場内では、競馬場に出る前の二歳馬の調教を中心に強い馬の育成、騎手の養成などが行われています。馬は東北、北海道をはじめ全国から集められたサラブレッド系の名馬ばかりです。

昔は追いはぎが出るといって恐れられた羽黒山の周辺も今では住宅が建ち並び、たくさんの人々が住むようになりました。

雨情旧居

野口雨情……一八八二～一九四五
詩人。茨城県多賀郡に生まれる。戦争中、戦火をさけて、東京都武蔵野市吉祥寺から鶴田地内羽黒山麓に疎開し、疎開先で没す。羽黒山麓には疎開当時の家が現存

松の緑も美しい育成牧場

■羽黒神社の碑

本社創立ノ年代詳ナラス古來羽黒山ト稱シ稻倉魂名ヲ祭神トス社域六百二十八坪頗ル眺望ニ富ム明治三十五年九月暴風雨アリ神樹ヲ倒シ古色ヲ損ス大正三年六月國有林二町四斥六畝五歩特賣ノ許可アリ一千一百八十二圓ヲ納メ之ヲ社有トナス五年十月允可ヲ得陸軍演習用地トナシ連年八十八圓ノ借料ヲ社入ス七年五月檜苗千株ヲ境内ニ栽ス同年十月新二鳥居ヲ建テ石ヲ配シ垣ヲ築キ子來經榮之ヲ獻ス大正八年九月更ニ相謀リ當社ノ由來ヲ記シ一碑ヲ樹ス以テ後人ニ傳ヘント欲シ余ニ文ヲ囑ス余任ニ社掌ニ在ルコト茲二十有餘年因テ謹テ其ノ梗概ヲ叙ス

従五位勲五等足達常正篆額
社掌齊藤源太郎撰
大正八年十月　小山田正敬書

滝尾神社

滝谷町交差点近くにある滝尾神社は、古くは「滝の権現（ごんげん）」と呼ばれました。

この「滝の権現」は今から百数十年前、日光滝尾神社の分霊を奉祀したもので、大巳貴命（おおむなちのみこと）の妃神田心姫（たごりひめのみこと）命を祭神としています。

この神社は以前、西原村の村社として祀られていましたが、いまは佐野街道（大寛・西原の一部）氏子の方々が管理運営に当たっています。例祭は以前四月十七日と十一月二十五日に行われていましたが、今はこの両日に近い休日に行われています。

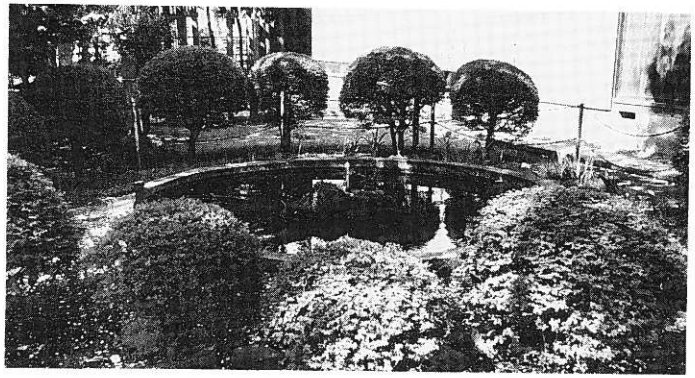
最近では毎月の第二日曜日に植木市が催されるようになりました。

この境内に丸い池があり中央に湧水がみられますが、昔は宇都宮の名水の一つに数えられ、「滝の井」と呼ばれ、また清泉が湧水するさい泡を吹く様子が馬のいななき（いななき）に似ていたことから「稲鳴の井」ともいわれていました。この池は旱天も涸れず、厳寒も凍らないといわれ、その水は飲料水となり、また水田に注ぎ付近一帯を潤すほどでした。そのため神社の縁起と清らかな清泉が、あいまって近隣住民の信仰が厚く、戦前の例祭はたいへんな賑いを見せたそうです。西川田町や幕田などからも農家や造り酒屋の人たちが清泉のお礼としてお参りしたり供物を上げたりしたほか、「お水取り」などの習わしが盛んに行われました。

しかし現在は、一段と市街化が進み、参拝する人や「お水取り」の人たちも少なくなり、例祭の人出も往年の賑やかさはなくなりました。

お水取り……「お水取り」とは、神仏に願いごとをかけた人が、七日間あるいは二十一日間と期日を定め、毎日お参りをして、そのさい清泉など水をもらい受け、これを自宅の神棚、または仏壇に供え、あるいは一定の方角の地面に注ぎお祈りをすることです。特に最終日は満願の日として重視されました。

滝尾神社拝殿



清らかな水の湧く滝の井

和尚塚

桜通りから宇都宮女子商業高校に至る通りの中ほどに遠歓寺（戸祭二丁目）というお寺があります。このお寺の境内の裏手に回ると納骨堂と記された門柱の立つ小高い塚があることに気がつきます。この塚は和尚塚と呼ばれ昭和八年九月に遠歓寺で納骨堂の建築工事を行ったさいに、供養碑一基と多数の経石が発掘されました。また今では見られませんがこの周辺には昭和二十年頃まで家来塚とか行人塚と呼ばれる塚が何カ所もあったそうです。そのため、いつのころからかこの周辺一帯を指して和尚塚と呼ばれるようになりました。

経石……小石に経文を墨書したもの多くは祈願、追善のために土中に埋める

■「戸祭と和尚塚」　郷間愛知著より

戸祭二丁目に現存する塚は「本塚」の一つですが、大東亜戦争の区画整理が行われるまで、本塚の外に中小の塚が五つありました。これを「家来塚」と呼んでおりました。この塚は子供たちにとってお山の大将や陣取合戦に格好な遊び場でした。冬季には家来塚の中の「中型塚」（戸祭二丁目八番地付近）の西下の芝原が闘犬場に利用され、たくさんの人が集まりました。子供等も、この塚の上から闘犬を見物して、「土佐犬が勝った」「ブルドックは強い」などと騒いだものです。

■和尚塚供養碑銘文

祥雲寺開山
雪江良訓和尚
大永五乙酉正月五日（一五二五）
入涅槃　長英代
大永六丙戌天一周忌
大永七丁亥天三年忌
享録四年卯七年忌
天文六丁酉十三年忌
天文十辛丑十七年忌
天文十八忌巳酉二十五年忌右長英代
弘治三丁巳三十三年忌
天正二甲戌五十年忌
正月五日　右長源代
寛永元甲子百年忌
正月五日　秀本代
延宝二甲寅正月五日
百五十年忌　秀悦代

享保九甲辰正月五日（一七二四）
雪江二百年忌　　龍代

和尚塚から出土した供養碑の銘文によると大永五（一五二五）年に没した雪江良訓の二百年忌にあたる享保九（一七二四）年にこの供養碑を建立したということが判ります。この石碑と経石は現在、塚の上に建てられている納骨堂の中に納められており、供養の日（春秋彼岸中の一日）だけ拝観することができるそうです。和尚塚の由来は雪江良訓が僧侶であったことから、そう呼ばれるようになったものと思われます。

なお「宇都宮故実抄」という古本（一七七一）には「御将塚（おしょうづか）は高定の墓なり」というような記録もあります。

また和尚塚の南にあたる一角を「亀鶴荘（きかくそう）」と呼んでいます。ここは雪江良訓和尚が庵を結んでいたところとも亀鶴という僧侶が住んでいたところとも伝えられています。

雪江良訓……今から五百数十年前、宇都宮十六代城主、宇都宮正綱（一四四七～一四七七）の弟に戸祭備中守高定という武将がおり、宇都宮の北方、現在の「戸祭元町」に出城を築いていました。現在の祥雲寺付近ではないかと思われます。この戸祭備中高定が後に剃髪して仏門に入りその名を「雪江良訓」と改めました。

遠歓寺境内にある和尚塚

丹（あか）ん堂

安養寺（材木町）の北側に丹ん堂と呼び親しまれてきた朱塗りのお堂が建っています。このお堂は今ではすっかりさびれてしまいましたが薬師如来を祀った薬師堂で、本尊の薬師如来像は現在も安養寺にたいせつに安置されています。

ここで堂の由来についてお話しましょう。

この丹ん堂は宇都宮城主奥平美作守忠昌（一六一四～一六六七）の屋敷内東北部に鬼門除けとして建てられたもので江戸時代の地図にも薬師堂として記載されており宇都宮から大谷に向かう城下町の出口にあったものと思われます。

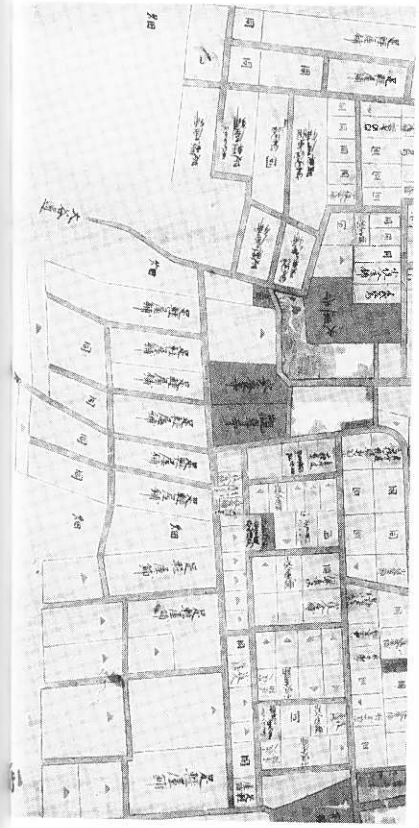
その後、忠昌が元和五（一六一九）年に下総古河へ国替えになると、この丹ん堂は、その屋敷跡に栃木の室から移転してきた安養寺によって管理されるようになりました。

当時は付近の住民から厚く信仰され、毎年四月八日に祭りが催されました。お堂には「め」「左右」などの絵馬や髪の毛が奉納され主に眼の守り神の信仰を得ていたようです。しかし、明治以後は次第にさびれ、祭りも途絶えてしまいました。

昭和の初めころに、長野さん（境町）長井さん（小幡町）など付近の有力者が発起人となり祭り（縁日）が再開されましたが、これも二～三回で中止となり、そのまま無住の堂として今日に至ってます。

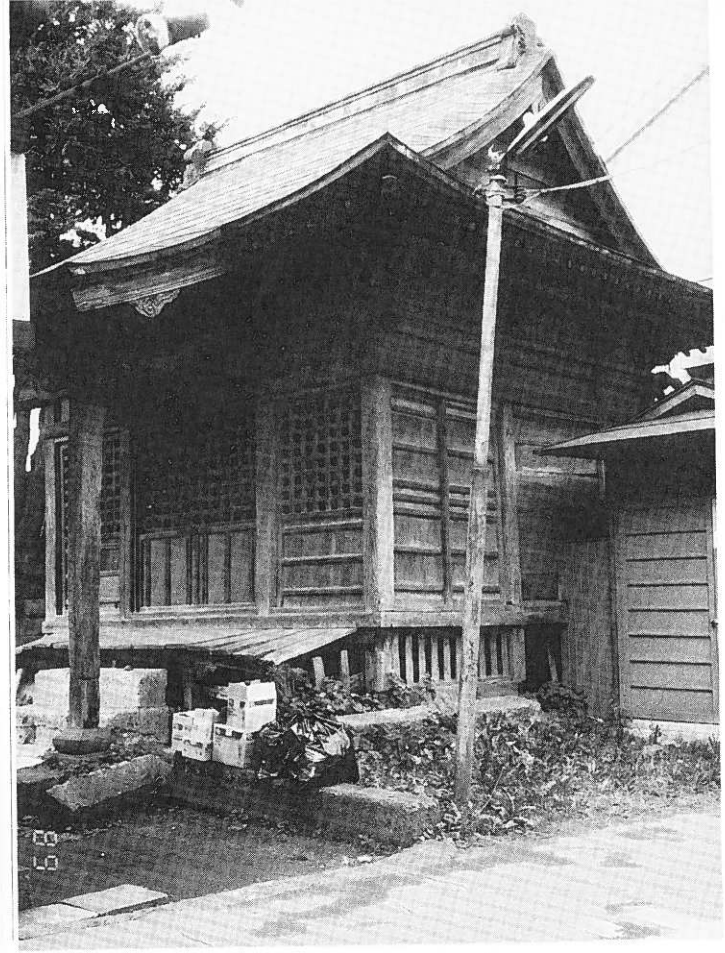
さらには最近市内の道路拡張、区画整理のため、取り壊される話もあります。

いずれにしても三百数十年の伝統をもち、宇都宮で一番古いといわれるこの丹ん堂が取り壊されることは宇都宮市民にとってたいへんな損失だと思います。何とかこのままの姿で次代に引き継がれるよう望んでやみません。

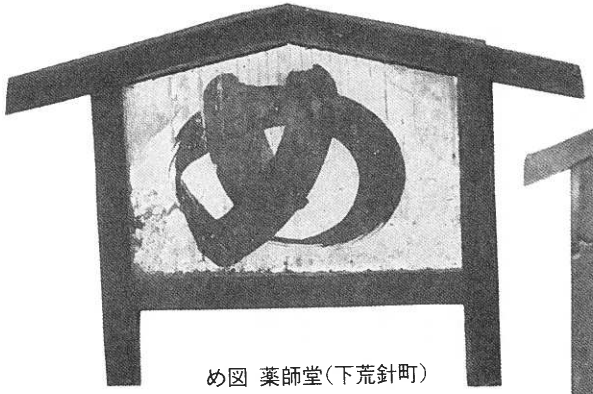


点線で囲んだ所が丹ん堂（薬師堂）の場所です。江戸時代宇都宮市内から大谷方面に向かうには、安養寺の前の道を北に曲がり、丹ん堂の所から大谷方面へと行きました。

江戸時代の丹ん堂付近



商店に挟まれ、ひっそり建つ丹ん堂



め図　薬師堂（下荒針町）

向かいめ図　薬師堂（鶴田町）

旧家の一年

毎年、同じ時期に繰り返し行われる行事を年中行事といいます。正月や盆はその代表的なものですが、第二次世界大戦前までは、実に様々な行事が行われていたものです。ここでは、桜三丁目の商家井岡家と、農家半田家の年中行事を紹介します。

井岡家の場合は、は二荒山神社に関するものや奉公人にまつわるものなど、いかにも二荒山を鎮守する旧市内のしかも商家らしい行事がみられます。一方、半田家では農作物の豊作を祈ったり、感謝したりするなど農耕に関する行事がみられます。

■井岡家の年中行事

一月一日●「若水汲み」／早朝、若主人が若水を汲み、神前に供え、若水を家族全員で飲みました。朝は雑煮を、昼は餅を焼いて、夜は米を炊いてその一部を神前に供えて残りを食べました。三ガ日の間は、サイコロのように切った餅を入れた雑炊（煮干やネギは入れない）を神棚に朝食前に上げて、朝食後に下げて丼に入れておき、七草雑炊の時に、まぜて食べました。

一月七日●「七草雑炊」／朝二時頃起きて「七草なずな唐土の鳥が渡らぬうちにストトン、ストトン」と唱えながら、材料（七草）を庖丁でたたいてそれと共に神前に上げた餅や米飯をまぜて、「七草雑炊」を作って食べました。

一月十一日●「鏡開き」／朝、お供え餅（鏡餅）を割り、小豆がゆに入れて食べました。上河原の初市に行き、だるまや花を買いました。

一月十四日●「お松下げ」／朝、雑煮を食べて松飾りなどをはずしました。

一月十五日●「春渡祭」／前日下げた松飾りなどを、二荒山神社の春渡祭へ持っていって燃やしました。

一月十六日●「藪入り」／前日と共に休日で、住み込みの奉公人（十人位おりました）に、お仕着せと小遣いを渡し、自宅（親もと）に帰したり、外出させたりしました。

一月二十日●二十日正月／特別の行事をしたか、どうか覚えていません。夕食に主人にだけ、さしみのご馳走を出しました。

二月●「初午」（旧二月初めの午の日）／前日にしもつかれを作り、八

毎年6月30日、二荒山神社境内で行われるワッカクグリ

幡山のお稲荷さんにお参りに行き、しもつかれと赤飯を上げました。この日は、女の人を休ませるため、針を持ってはいけないとか、風呂は焚かない習わしがありました。

二月三日●「節分」／豆がらにさした鰯の頭に唾をつけて焼いて、これを家の角々のつぼに引かけて上げました。煎った豆をまいて「福は内、鬼は外」とどなりました。その豆を一つかみで、自分の齢の数をつかむと、縁起がよいなどといわれました。また、その豆を自分の年齢の数だけ食べました。二荒山神社などで豆まきがあり拾いに行きました。

三月三日●「女の節句」／旦那様の実家で、おひな様を持って来て座敷に飾りました。草餅、白餅、赤餅を菱形に切って上げました。このほか、白酒も上げました。

三月●「彼岸」／仏様を飾り、お寺参りをしました。だんごやボタモチを作って上げました。

五月四日●「宵節句」／のぼり、鯉のぼりを立てて、おかずをたくさん作りました。

五月五日●「男の節句」／米の粉で柏餅を作って食べました。ヨモギと菖浦を軒にさして飾りました。夜、菖浦を風呂に入れて入りました。

六月三十日●「ワッカくぐり」／二荒山神社に参り、境内に作られた茅の輪をくぐりました。

七月七日●「七夕」／芋の葉の水を集めて、墨をすり、短冊に「天の川」などと書いて、竹につけて、前夜に庭に飾りました。七日の夜はねぶた流しといって、田川の橋の上から短冊に願いごとを書いた物を流しました。

七月十三日●「迎え盆」／定紋つきの提灯を持って、お寺に仏様を迎えに行きました。仏壇は締めて、座敷に真菰を敷いて棚を作り、麻がらを足にして、ナスで馬や牛を作って、ほおずき、ワカメ、そうめんなどと

共に仏様に上げました。夕食はそうめんを食べました。

七月十四・十五日●「盆」／朝、仏様に上げたボタモチを、昼食にはうどんを、夜はとうなす汁で米飯を食べました。

七月十六日●「送り盆」／送りだんご（白いもの）を作り、お寺に仏様を送りました。使用人に赤褌巣（女には腰巻）と浴衣をやりました。

八月一日●「八朔」／多気山に、お参りに行きました。赤飯を炊きました。

旧八月十五日●「十五夜」／満月の夜に月の見える縁側に、ちゃぶ台を置き、すすき（五本）をさし、大根、里芋、柿、栗、米飯、けんちん汁、米粉のだんご（十五個）などを上げました。子供にだんごを盗まれると縁起が良いといわれました。

旧九月十三日●「十三夜」／お供え物は、十五夜と同じようですが、すすきは三本で、だんごは十三個上げました。

十月十日●「ぢじんさま」／ぢんぢさまのお祭りを行いました。小豆飯を炊きました。

十月二十日●「恵比寿講」／恵比寿、大黒を飾り、お祭りをしました。生きている鮒を上げ、終わると井戸に放しました。枡にお金を入れて神様に供えました。奉公人は、この日より足袋をはくことを許されました。

十一月十五日●「七五三」／てんぷらを揚げて食べました。

十二月二十二日●「冬至」／冬至唐なすといって、カボチャを食べ、ゆず湯を沸かして入りました。

十二月十五日●「冬渡祭」／二荒山神社にお参りしました。

十二月二十八日●出入りの鳶職が門松を立て、井戸、便所に幣束をつけた輪〆を飾りました。餅まき（海苔餅、豆餅、ごま餅を含めて四斗）をしました。すす払いをしました。御節料理を作りました。

十二月三十一日●「大晦日」／晦日そばを食べました。

■半田家の年中行事

一月一日●「元旦」／年男（一家の主人）が若水を汲み、大神宮様に上げ、この水で雑煮を煮ました。雑煮は、大神宮様、門松、仏様、稲荷様に上げそれから、家族で朝食を食べました。昼食は、手打ちうどんや雑煮の残りを食べました。夕食は、ごはんを食べました。

一月七日●「七草粥」／粥の材料はアブラ菜、ナズナなど七種類の野菜を、まな板の上にスリコギ・庖丁をのせて、男が神棚の前に行き「七草なずな、唐土の鳥が渡らぬうちにストントンストトン」と言いながら刻んで粥を作って食べました。

一月十二日●「鍬入り（山入り）**」**／鍬を持って畑に行き、三つの畝を作り半紙に大豆や麦を供えて、烏を呼びました。また、山に入り鍬で周りをきれいに刈って松の木を立てて幣束を付けて、烏を呼びました。

一月十四日●「トリヤキ（ドンドヤキ）**」**／小学校の二年生から高等科ぐらいまでの子供たちが門松をもらいに来るので門松、藁、竹などとお金をあげました。子供たちは、たんぼに行きクヌギの木を立て、枝に藁を積んで、周りに門松や竹を置いてトリゴヤを作りました。この様な小屋を大小二つ作り、午後六時半頃、小さい小屋に火をつけ、七時頃に大きい小屋に火をつけました。

一月十五日●「アズキ粥」／アズキ粥を作りハラミバシという真中を太くしたノウデンボの箸で食べました。前の日（十四日）にカキバナを購入して堆肥の上に飾りました。そして、ノウデンボの箸も作りました。

一月十六日●「藪入り」／仕用人を外出させました。

一月二十日●「小正月・エビスコ」／エビス・大黒を五升または一升枡に飾りました。

二月一日●「ジロウの一日」／別になにもしませんでした。

二月八日●「コト八日」／別になにもしませんでした。

二月十日●「地鎮様」／この日は、鍬や鎌を使いませんでした（クワカマ止め）。餅をついて神棚に供えました。一日休みをとり嫁には、餅を背負わせて実家に里帰りさせました。カラ臼をつきました。その音で蛙が種を背負って来るといいました。

二月●「初午」／二月の最初の午の日に屋敷にヤグラを建てて、お稲荷様を祭り、子供たちに太鼓を叩かせました。赤飯を炊き、シミツカレを作り藁でツトッコ（筒）を作って、上と下にシミツカレを入れて、お稲荷様に供えました。「七軒の家のシミツカレを食べるとかぜをひかない」といいました。

二月●「節分」／鰯の頭を焼いて、唾をかけ大豆の殻に挿して、軒先などに「福は内」と言いながら供えました。夕方、煎った大豆を「福は内・鬼は外」と言いながら部屋ごとにまきました。豆まきが終わると、各人とも自分の年齢の数だけ大豆を食べました。

三月三日●「ひな祭」／ひな段におひな様を飾り、イシズ（石臼）で甘酒をひいて作り供えました。初節句の時は、餅を菱形に切りました。嫁を実家に里帰りさせました。

三月●「**彼岸**」／お墓にお参りに行きました。だんごやボタ餅を作って上げました。

四月八日●「**お釈迦様**」／小豆飯とか小麦まんじゅうなど、珍しいものを作って食べました。家の軒先に藤の花を飾りました。

五月五日●「**節句**」／鯉のぼりや武者人形は、妻の実家からもらって飾りました。軒先には、ヨモギと菖蒲を飾りました。湯舟に菖蒲を浮かべて菖蒲湯にして、入りました。女性は菖蒲湯に入ると、「ノウヤミしない」と言われました。この日に働くとモノグサの節句働きといい、お盆に死ぬといわれました。

六月一日●「**ムクレ**」／小豆飯を食べました。桑の木に逆にぶらさがると良いといわれ、ぶらさがりました。

七月一日(新暦では八月一日)●「かまぷた・釜のふた」／地獄の釜のふたの開く日で、仏様に小麦まんじゅうやかまぷた餅を供えました。また、この日は「こと日」といって一日休みました。

七月七日●「**七夕**」／朝早く芋の葉に溜まった露を集め、硯で墨をすって短冊に願い事を書いて、笹竹に飾り家の前に立てました。そして、朝早くまだ暗いうちに子供たちが、ネムッタナガシといって、川(鶴田川)で水浴びをしました。この日朝遅いと寝ぼうになるといわれました。午前中には墓掃除をしました。

七月十三日●「**迎え盆**」／盆棚を作り麻がらで鳥居を作り、真菰を敷いてその上にハスの葉を広げて、ナスで作った馬や、ほうずき、ワカメを供えました。午後、仏様を迎えに提灯を持っていきました。

七月十四日●朝は、あんこのだんごを食べ、昼はうどん、そして夜はまぜごはんを食べました。

七月十五日●朝は、おはぎを食べ、昼はうどん、そして夜はごはんを食べました。

七月十六日●「**送り盆**」／「土産だんご」という白いだんごを作りました。お坊さんに拝んでもらった後、午後送ります。家を出る時、麻がらに火をつけます。真菰に、だんごや果物を包みお墓に持っていき、その包みをお墓の上に乗せました。

七月十六日●「**盆踊り**」／坪の人たちが総出で私の家の畑で盆踊をしました。歌は「日光和楽」でした。

八月一日●「**八朔**(はっさく)」／前日に多気山に行き御籠をしました。お札を受けて帰り大神宮様に供えました。

八月十五日●「**十五夜**」／すすき五本・栗・柿・花・さつま芋・しょうが・大根・だんご十五個・白いごはん・けんちん汁などを縁側に出した膳の上に供えました。そして、子供たちがワラ束で芋ガラを包んだワラテッポウを作りました。各家を回り庭で土を叩きながら「大麦あたれ、小麦あたれ、三角畑のそばあたれ」と大声で叫びました。その子供たちに小遣いやお菓子を配りました。

九月九日●「**オクンチマツリ**」／鎮守様である高麗神社にお参りしました。

九月十三日(旧暦の八月一三日)●「**十三夜**」／十五夜のときと同じようにお供えをしますが、すすきが三本とだんごが十三個になります。そして、子供たちのワラテッポウも行いました。

十月十日●「**地鎮様・鍬鎌止め**」／餅を月の数だけ作ります(十二個作ります。ただしうるう月は十三個作ります)。嫁に餅を持たせて里帰りさせます。帰りに実家からしょうがをもらってきます。蛙が土にもぐる月というので鍬や鎌を使わないようにします。

十月二十日●「**エビスコ**」／恵比須様と大黒様を神棚から下ろして、お膳に山盛の白いごはん、おにしめ、お頭付、お金がたまるようにとお金、そして、川から生きたままの魚を取ってきてドンブリに入れて供えました。魚は翌朝、川にはなしてやりました。この日は、肥料屋さんが農家の人たちを招待して、ごちそうしてくれました。肥料代を請求するためでした。

十一月●「**冬至**」／かぼちゃを食べると風邪をひかないといわれています。そして、ゆずをお風呂に入れて入りました。

十二月一日●「**カビタシ**」／水神様のお祭りで、丸餅を二つぐらい川(鶴田川)に持って行き投げ入れました。

十二月八日●「**ダイマナク**」／物干しの先にメカイ籠をつけて家の入口に立てました。そして、ヒイラギの木にネギを刺して焼き、悪魔が入ってこないようにしました。おこわを作りました。この日は二月八日と対をなす行事です。

十二月十三日●「**ススサライ**」／大神宮様を外に出してすすはらいをしました。「すなばらい」といって、コンニャクを食べました。

十二月二十六日●「**門松**」／この日に松や竹を切って翌二十七日に立てました。

十二月二十七日または二十八日●「餅つき」／一俵ぐらいの餅をつきました。餅は切り餅にしました。

十二月三十一日●「**大晦日**」／そばや正月料理を食べました。「夜遅くまで起きているもんだ」と言われ起きていました。

西公民館地域内に設置された高等学校の変遷

雑木林や畑の広がる宇都宮西部の台地は、第十四師団を設置する際のかっこうな土地として開墾されました。しかし、戦争が終わり軍隊が解体されるとその広大な土地、施設は民間に払い下げられることになりました。そして、おりからの教育の近代化にともない、市民から教育機関の設置の声が高まるとその多くが私立学校に移管されました。西部地域に私立の教育機関がたくさんあるのはこうした背景によるものです。

県庁前にあった高等女学校（現・宇女高）校舎（明治40年）

■宇都宮高等女学校

明治八（一八七五）年十月／栃木女学校創設（現栃木市蔵部町）

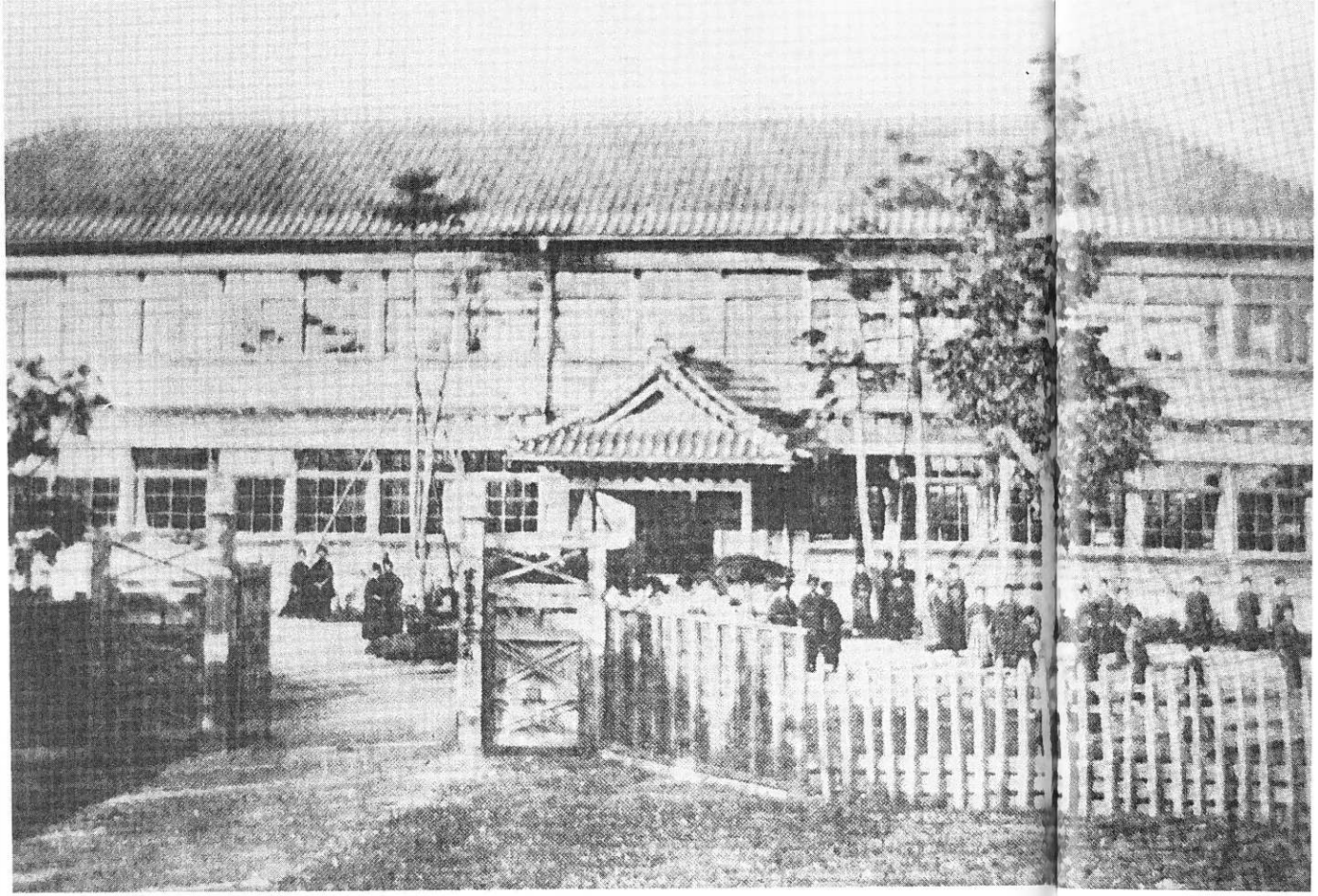
明治十（一八七七）年二月／栃木模範女学校と改称

明治十二（一八七五）年七月／栃木第一女子中学校と改称

明治十四（一八八一）年五月／栃木県第一中学校と合併し栃木県第一中学校女子部と改称

明治十八（一八八五）年四月／宇都宮、塙田へ移転栃木県中学校女子部と改称

明治三十六（一九〇三）年四月／**現在地へ移転**　栃木県立宇都宮高等女学校が誕生

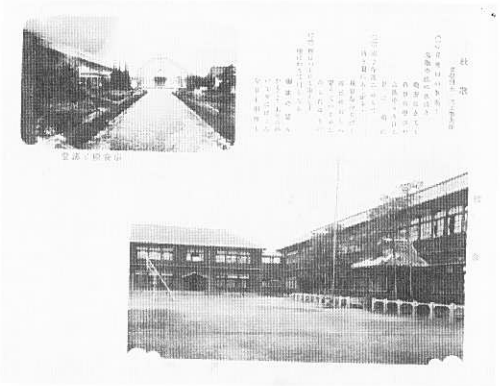


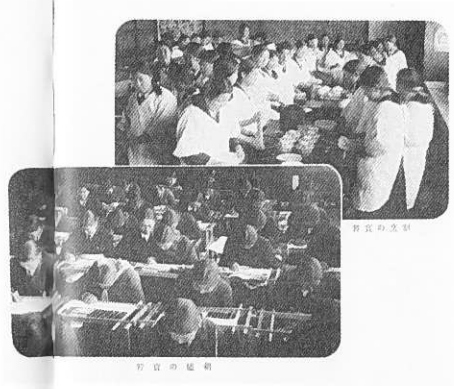
明治末期の宇都宮女子技芸学校（後の実践女学校）

■宇都宮女子技芸学校

明治三十四（一九〇一）年四月／宇都宮高等女学校内技芸専修科併置

明治四十三（一九一〇）年四月二十六日／私立宇都宮女子技芸学校として旧市立商業学校（元宇都宮尋常小学





実践女学校の卒業アルバム

校西校）校舎を使用して発足
大正三（一九一四）年一月十三日／校舎類焼現西武デパート駐車場付近へ移転
大正四（一九一五）年九月二十六日／校舎新築移転（**現・桜小学校**）
大正十二（一九二三）年四月十六日／校名を宇都宮実践女学校と改称
昭和十八（一九四三）年四月一日／市立宇都宮高等女学校と改称
昭和二十四（一九四九）年四月一日／県立宇都宮女子高等学校に統合し廃校

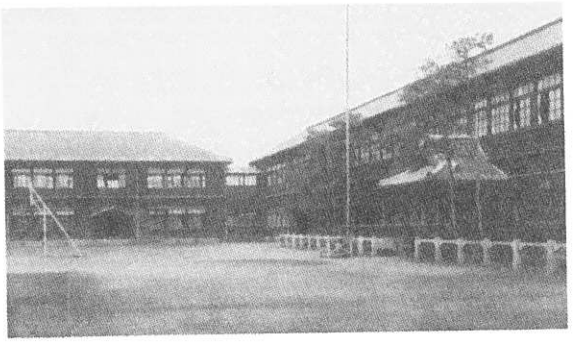
■作新学院
明治十八（一八八五）年九月二十八日／下野英学校として創設
明治二十（一八八七）年一月／塙田村二里山へ校舎を新築移転
明治二十一（一八八九）年九月／私立作新館と改称
明治三十二（一八九九）年／私立下野中学校と改称
昭和二十二（一九四七）年四月／**現在地へ移転**
昭和二十二（一九四七）年八月／作新館高等女学校と併合し作新学院と改称
創設者：船田　兵吾

■宇都宮短期大学附属高等学校
明治三十三（一九〇〇）年十一月三日／私立共和裁縫教習所として創設
明治三十四（一九〇一）年／共和裁縫女学校と改称
大正十三（一九二四）年三月二十四日／宇都宮須賀女学校と改称
昭和七（一九三二）年四月／宇都宮女子高等職業学校と改称
昭和二十一（一九四六）年四月／須賀高等女学校と改称／**現在地へ移転**
昭和二十三（一九四八）年四月一日／

宇都宮須賀高等学校と改称
昭和四十三（一九六八）年九月一日／宇都宮短期大学附属高等学校と改称
創設者：須賀　栄子（館林藩奉行須賀正直六女）

■宇都宮学園高等学校
明治四十四（一九一一）年二月三日／宇都宮実用英語簿記学校として創設
大正四（一九一五）年三月／宇都宮実業学校と改称
大正十一（一九二二）年三月／栃木県宇都宮実業学校と改称
昭和四（一九二九）年四月／一の沢一丁目三七へ移転（現・宇女商）
昭和二十三（一九四八）年一月／宇都宮学園高等学校（男子部、女子部）に改称
昭和二十五（一九五〇）年十一月／**現在地に移転**
昭和二十八（一九五三）年十月七日／男子独立高校となる。
創設者：上野　安紹（宇都宮市寺町手塚藤兵衛三男）

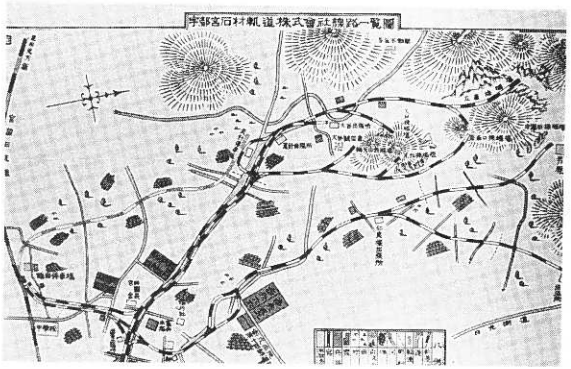
■宇都宮女子商業高等学校
昭和四（一九二九）年六月十七日／宇都宮女子実業学校創設
昭和十八（一九四三）年十一月二十四日／宇都宮女子商業学校と改称
昭和十九（一九四四）年三月三十一日／同所へ宇都宮第二女子商業学校を創設
昭和二十一（一九四六）年五月十七日／睦町一七へ移転
昭和二十三（一九四八）年一月二十三日／第二女子商業学校と併合宇都宮学園高等学校（高等科女子部）と改称
昭和二十五（一九五〇）年十月二十日／**現在地へ移転**
昭和二十八（一九五三）年十月七日／宇都宮女子商業高等学校と改称



宇都宮実践女学校校舎（昭和十年代）＝「型に校舎が並ぶ。昭和二十四年、宇女高に統合の後、校舎はそのまま新設の桜小学校へと引きつがれる

［資料］宇都宮市略年表（明治以降の西公民館区域内を主とする）

年号	西暦	月日	事項
明治元年	一八六八	四月一九日	宇都宮城、戊辰戦争により落城し城下町大半焼失
〃 五年	一八七二	一〇月八日	乗合馬車、宇都宮～千住間に開業
			宇都宮荒尾崎に招魂社造営（後の栃木県護国神社）
〃 六年	一八七三	一〇月	宇都宮県を廃し、栃木県と合併
			西原十カ新田および六軒を合併して宝木村となる（後の国本村）
〃 一七年	一八八四	一月二四日	栃木県庁、栃木より宇都宮に移転
〃 一八年	一八八五	四月二六日	栃木県師範学校と栃木県第一中学校、栃木より宇都宮に移転
		七月一六日	東北線、大宮～宇都宮間開通
〃 一九年	一八八六	九月一六日	下野英学校創立（後の作新学院）
		七月一六日	東北線宇都宮～阿久津間開通
〃 二〇年	一八八七	四月九、一〇日	宇都宮競馬会、鶴田村東原で競馬を開催
〃 二三年	一八九〇	八月一日	日光線開通
〃 三〇年	一八九七	二月三日	宇都宮軌道会社開業
		一二月	材木町～大谷間人車鉄道敷設
〃 三一年	一八九八		野州人車軌道会社開業

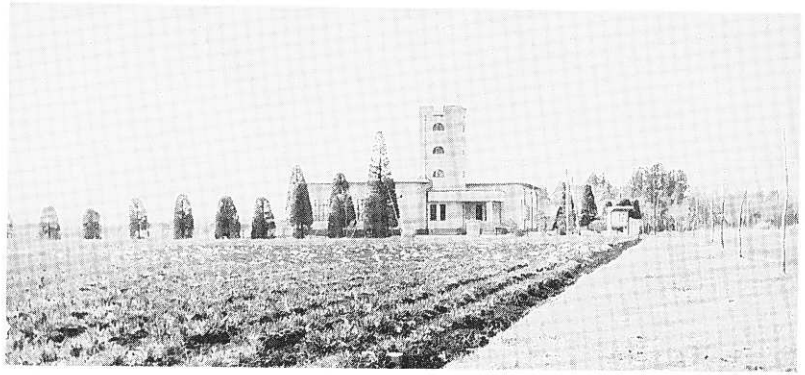


宇都宮石材軌道路線（大正5年）

〃 三三年	一九〇〇	一月三日	共和裁縫教習所、西塙田に開所（後の宇都宮短期大学附属高校）
〃 三五年	一九〇二	一〇月九日	材木町・鶴田間人車鉄道敷設
〃 四一年	一九〇八	三月三日	歩兵第六十六連隊、国本村に入る
		四月～一一月	第十四師団司令部、国本村に入る
			騎兵第十八連隊が城山村へ、野砲第二十連隊が姿川村へ、輜重第一四連隊が城山村へそれぞれ入る
〃 四二年	一九〇九	五月一九日	歩兵第五十九連隊が、習志野から国本村へ入る
		五月	軍道（十間通り、後の桜通り）両側に桜の木を植樹
〃 四四年	一九一一	二月三日	宇都宮実用英語簿記学校、塙田に創立（後の宇都宮実業学校、現宇都宮学園高校）
		五月	招魂社、県社に昇格（後の栃木県護国神社）
大正四年	一九一五	七月一日	宇都宮石材軌道会社の軽便鉄道、鶴田・荒針間開通
		九月二六日	女子枝芸学校、西原に移転（後の宇都宮実践女学校）
〃 八年	一九一九	四月九日	第十四師団、シベリア派遣となり青森から出発
〃 九年	一九二〇	七月～八月	第十四師団、シベリアから帰還
昭和初期			丹ん堂（薬師堂）の縁日が二～三回催された（現在は行われていない）
〃 四年	一九二九	六月七日	宇都宮実業学校、塙田から戸祭に移転
		六月一七日	宇都宮女子実業学校創立（後の宇都宮女子商業高校）

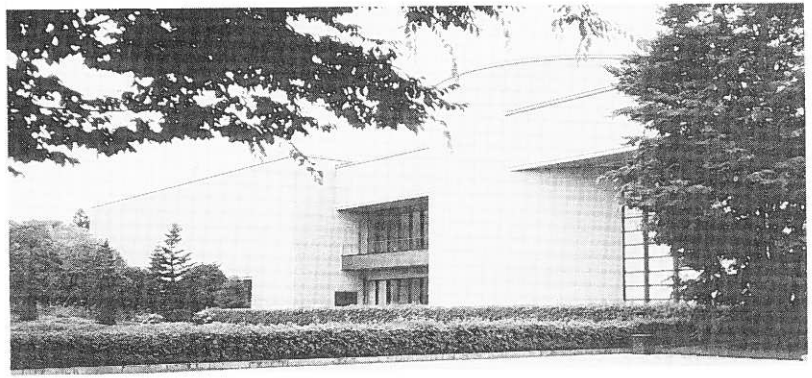
大谷街道を荷馬車が行く（昭和3年）

〃六年	一九三一	三月三日	東武鉄道が宇都宮石材軌道会社を併合
		四月七日	陽西土地区画整理事業組合創設
〃七年	一九三二	二月二四日	第十四師団に動員命令出る
		三月四日	第十四師団、上海に出動
昭和八年	一九三三	九月	和尚塚から供養碑一基（一七二四年建立のもの）と多数の経石発掘
〃九年	一九三四	五月	第十四師団、満州から帰還（上海から満州に転戦していた）
〃一〇年	一九三五	一月一日	宇都宮測候所（後の宇都宮地方気象台）が塙田から西原に移転
〃一二年	一九三六	二月二七日	二・二六事件に際して、第十四師団が戒厳出動
〃一三年	一九三七	七月七日	支那事変起る
		八月一四日	第十四師団に動員令下り出征
〃一四年	一九三九	四月一日	城山村駒生の一部一の沢が市に編入
		一二月	第十四師団帰還
〃一六年		三月八日	太平洋戦争起る
〃一九年	一九四四	一月	野口雨情、姿川村鶴田に疎開（昭和二〇年一月二七日死去六四歳）
〃二〇年	一九四五	七月三日	米軍の空襲を受け、市の大半焼失
		八月一五日	太平洋戦争終る
		一〇月	米陸軍、市に進駐（約一年で撤退）



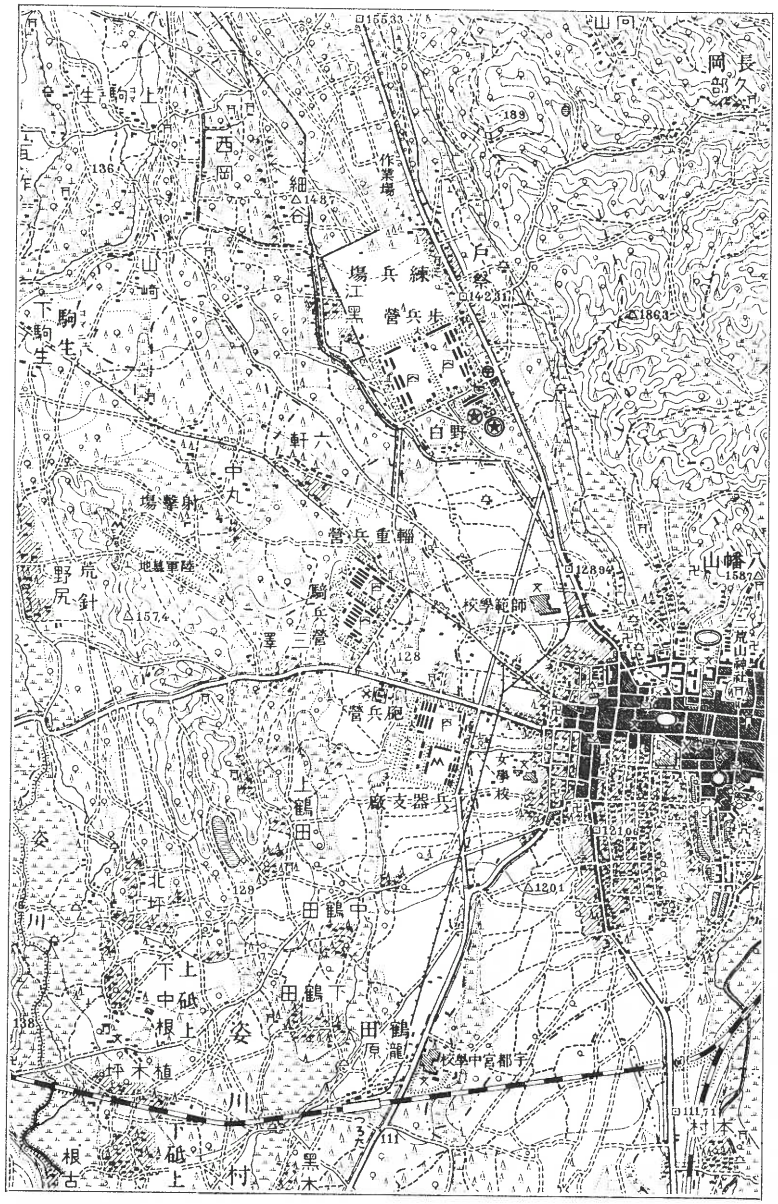
麦畑にかこまれた宇都宮測候所

〃二一年	一九四六	四月	国立栃木病院創設（第十四師団司令部跡地）
		三月一日	宇都宮専売局が兵器支廠跡地に移転
〃二三年	一九四七	一月	須賀高等女学校が旧野砲兵二十連隊跡地に移転
〃二四年	一九四九	四月一日	下野中学校（後の作新学院）が輜重連隊跡地に移転 市立桜小学校が実践女学校跡地に、市立陽西中学校が陽西地区にそれぞれ開校
〃二五年	一九五〇	一一月	宇都宮学園高校旧野砲二十連隊跡地に移転
〃二七年	一九五二		国本村戸祭・宝木の南部、市に編入
〃二九年	一九五四	二月一日	城山村・国本村、全村、市に編入 中央競馬会宇都宮育成牧場開設
〃三〇年	一九五五	二月一日	姿川村全村、市に編入
〃三三年	一九五八	四月一日	市立富士見小学校開校
〃三六年	一九六三	四月一日	市立宮の原中学校開校
〃四六年	一九七三		城山村南小学校が移転し、明保小学校と改称
〃五三年	一九七八		県立美術館、下野三楽園跡地に開館
〃五七年	一九八二	一〇月三日	栃木県中央公園が宇都宮専売局（旧兵器支廠跡）後に開園
		一〇月三日	県立博物館が開館
〃五九年	一九八四	四月一日	市立西公民館開館
〃六二年	一九八七	六月八日	西公民館において「ふるさと研究」講座開講

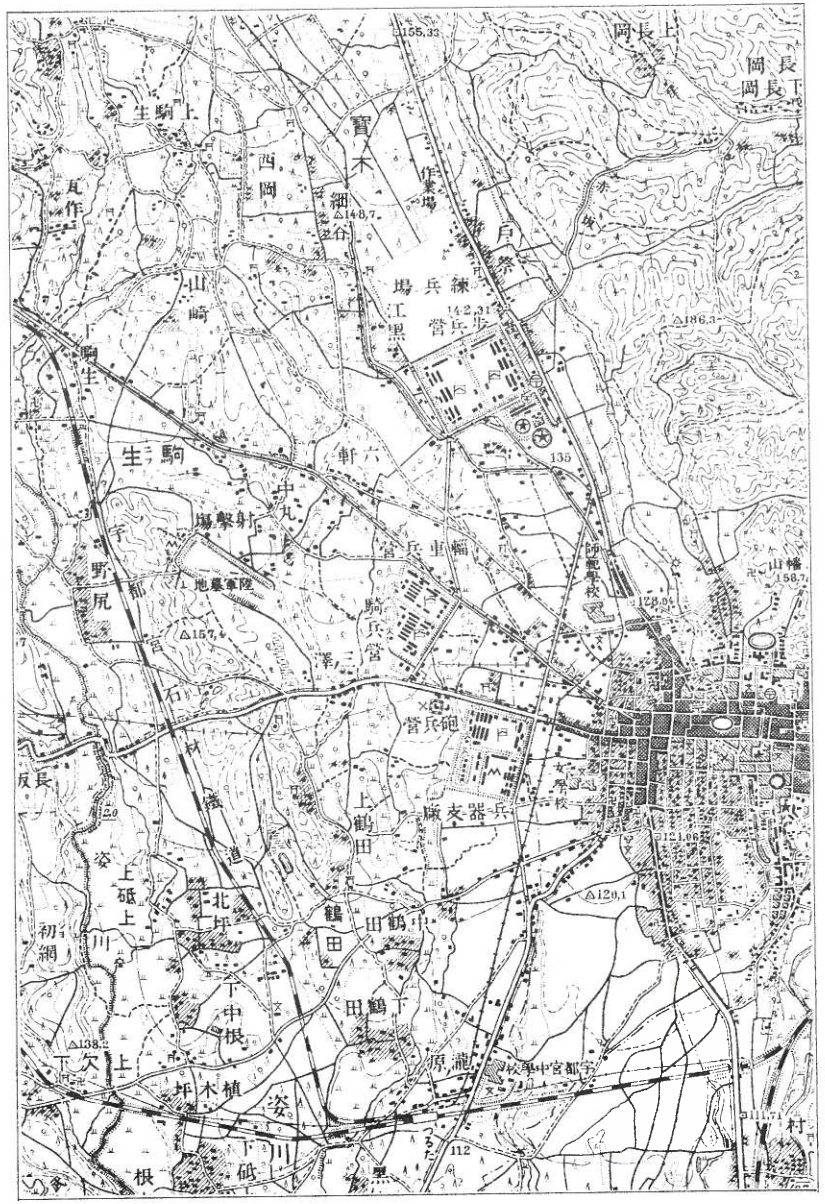


文化の殿堂、栃木県立博物館

［資料］地図で見る宇都宮市西部の変遷

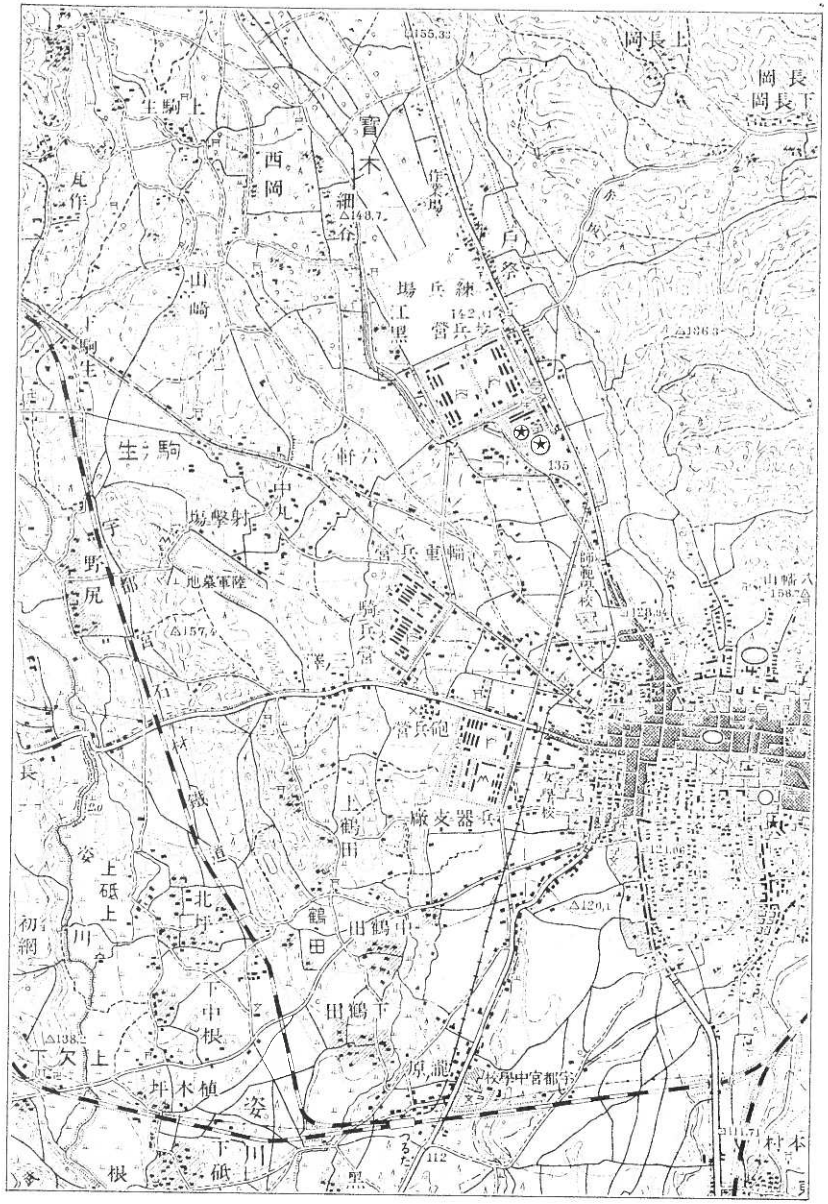


明治42年発行＝移転新設になった第14師団関係の兵舎等が記されています。軍関係の施設の数の多さと広さとがあらためてわかります



大正８年発行＝軍道(現・桜通り)に桜が植樹されたことが記されています。大谷街道、鹿沼街道沿いにも家が建ち町並みが形成されつつあります

昭和９年発行＝町並の移り変わりと話は別になりますが、この地図から第14師団の施設の名称がすべて消えています。敵に知られないための配慮ですが戦時色が強くなりつつあることが感じられます



大正15年発行＝地図上の何も記されていない空白の部分は、畑の部分です。当時、軍道より東側にもまだたくさんの畑があったことがわかります

編集後記

宇都宮市立西公民館、黒須凰寿館長の提唱でこの「ふるさと研究」の会が発足したのが昭和六十二年六月八日のことです。それから、もう早いものですでに三年の月日が流れました。毎月二回(月曜日)の講義を受け、時には現地に赴き勉強しました。

館長および職員の方々にはたいへんなご協力を得まして会は今日まで続いております。

さらにこの会に、当初から欠かさずご指導をいただいた柏村祐司先生には、県立博物館主任研究員という要職にありながら貴重な休み(博物館は月曜日休館)を利用して出席され私たちの指導に当り、歴史の見方、調査の方法またそのポイントなど熱心に教えていただきました。

お陰で私たち会員、歴史の学び方あるいは先人の生活模様に対する調査のやり方など、その一端を覗きみることができました。

この研究は主として西公民館を区域とする地域の移り変りを調査したもので、宇都宮市の一部分に過ぎませんが、当地域は昔軍施設の大部分を占めていたなど特殊な地域ですので明治以後たいへんな変わりようです。この変遷に調査を進めたもので、その成果は大きいものと自負しております。この結果を私たちだけのものとしておくことは惜しいような気がしているとき、黒須館長をはじめ柏村先生のおすすめご援助があり、出版にいたったものです。

宇都宮市を愛する人、郷土の研究に興味をよせる方など一人でも多くの人に接することができますれば幸いと思います。

この「ふるさと研究」講座の運営ならびに小書出版に当り、次の方々に多大のご協力を得まして、会員一同深く感謝の意を表するものです。

○お話をしていただいた方

斎藤　一郎
長谷川徳一
荒井　省三
安納　重雄
羽石要次郎
井岡　トミ
松本　　勲
中臣　利子
半田　忠彦
半田キヨノ
小林　孝平

○写真を提供してくださった方

石井　敏夫
宮沢吉五郎

○会運営にたずさわった西公民館の職員の方

黒須　凰寿
大垣　冨司
大久保敦子

○ご指導をいただいた方

柏村　祐司　(以上敬称略順不同)

○「ふるさと研究」会員氏名

富貴沢美佐子
松浦　利春
落合　美津
山本保一郎
寺内　楽子
安納　トシ
仙波　美子
仲山　敏雄
鶴田　恭子
渡辺　芳美
福田　　稔

陽西今昔物語

1990年6月15日　第2刷発行

宇都宮市西公民館ふるさと研究講座編
発行所●宇都宮市西公民館
〒320 宇都宮市西一の沢町17-32
☎0286(48)7480

編集制作●編集工房 随想舎
〒320 宇都宮市桜1-3-10
☎0286(33)0489／Ⓕ0286(36)4077